
魔王から勇者になるために

送り狗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王から勇者になるために

【Nコード】

N3414V

【作者名】

送り狗

【あらすじ】

俺は突然、異世界に召喚された。理由は簡単！魔王が侵略を開始したからだそうだ。召喚された俺に、目の前の女の子が尋ねてくる。

「あなたは勇者様ですか？」

俺は答えた。

「はい」

そして、目の前の山が割れた……

勇者として召喚されたはずの俺は「史上最悪の魔王」そう呼ばれて

しまい、俺の元に本物の魔王と勇者が現れて「くたばれ魔王！」

「いや、魔王はお前だろ？」

まさかの、魔王と勇者が手を組んで俺を倒しに向かってくる。

えっ！？ それって逆じゃない

プロローグ（前書き）

召喚されて少し後の話です。

プロローグ

これが今、俺が体験している現状だった。

旅が始まり落ち着いてきたところで、適当にお城を構えてみた。

「うーん。じっくりする」

今日もバカな、魔王と勇者が現れた。

「くたばれ魔王！」

「いや、魔王はお前だろ？」

このやり取りは、何回目だったか？ 忘れちゃった。

俺は魔王をつまんで外に放り出す。この作業にも疲れてきた。

「また………旅にでも出るか？」

「俺を無視するな魔王！」

「いや、魔王は今さっき外に放り投げたぞ」

「言い訳無用！ てやあー！」

勇者もつまんで外に放り投げた。

「俺さっきまで普通の高校生だったんだけどなー」

「うん。やっぱり旅に出るか！」

「そうだ！ その前に、俺がこうなっちゃったお話でも、暇つぶしにするかなー」

・
そうして話し始める。普通な高校生のエンジョイした話を・・・

プロローグ（後書き）

つまんでつてあるけれど、別に主人公は大きくありません。普通の身長です。

不本意な召喚（前書き）

召喚されたときのお話になります。

不本意な召喚

高校3年生の俺はもうすぐ受験が控えていた。しかし、いつものようにどうにかなるだろうと言う、甘い考えで俺の脳は支配されている。

今、俺の脳内では3つの勢力が争っていた。

彼女が欲しい・授業がめんどくさい・鼻が痒い。だ！

彼女が欲しい勢力と授業がめんどくさい勢力は何とかなる。しかし、鼻が痒い勢力はどうにもならなかった。鼻が痒い勢力、強し！

必死に抵抗する2つの勢力。しかし、とうとうこの三つ巴のバランスが崩れてしまった。そう、鼻が痒い勢力の増援だ。

三つのバランスが崩れた今、俺は誰にも止められない。そして・・・

俺は教室の窓際の席、俺の特等席に座って鼻をほじっていた。幼馴染には汚いといわれても無視していると拳骨を貰い、鼻から大量に赤い液体が噴出してきた。

「おば！？ おばえ、なびするの！？」

赤い液体はとどまることを知らない。足元の床はどんどん赤く染まっていく。

「ごめん！ 救急車呼ぶー」

こんな状況でもものんきに幼馴染は、電話する。その前にもっと反省しろよ。

「もっしーもおーし。鼻血吹いて止まらない奴がいるので、できれば救急車をお願いしたいんですけどー——」

「——ええ、できればですよ。では、いらないという事で」

「だめだった。てへっ!!」

可愛くポーズを取る幼馴染。俺はここまで殺してやりたいと思ったことはない。

「おまええ——」

俺は最後まで言えなかった。俺の足元の血だまりに脚をとられたからだ。えっ!?! なんで足が片方沈んでいるんだ？

そう思ったときには両足が「ドブン」と沈んでいて、膝から先が見えなくなっていた。

「おまえっ!! なにかしたのか？」

俺はまよわず幼馴染に聞いてみた。こいつが怪しい。100%怪しい。

「知らないよ？ それより、なんで沈んでるの？」

「こっちが聞きたいわっ！」

なぜ、どうして？　こういう困ったときには必ず俺の周りには誰もいなくて、いつも苦勞するのは俺だ。今回は幼馴染がいる。でも、巻き込めない。どうなってしまうのか分からないからだ。

「おいバカ！　誰か人呼んで来い！　早くだ！」

この時点で腰まで沈んでいる。身動きが取れない。もしかしたら、助けを呼べば助かるかもしれないからと言う期待を持つての行動だった。

「うん！　分かったよ！」

幼馴染はそう言うのと、くるっと振り向いて人を呼ぼうとする。

「あっ、そうだ！」

くるっと振り向いたまま、勢いに乗せて回し蹴りを食らわしてきた。狙いはちょうど俺の顔面で……………

「ぶっ!?!」

俺に綺麗にヒットした。俺は、腰まで沈んでいて動けない状態。衝撃を和らげることもできずにもろに喰らってしまい。

「……………」

行き絶え絶えになってしまった。とってもピンチ！　そして瀕死！

「呼んでくるねー」

遠足にでも行くのかと思うくらい軽く言うと、ようやく助けを呼びに言ってくれた。俺は軽く手を振ってやると、胸の辺りまで一気に沈んでしまった。

「やばっ!!」

そう言った瞬間には頭が沈む。そして、闇になる。

見えない。聞こえない。匂わない。味がしない。感じない……

血の中に沈んでしまったというのに、五感全てをつかって状況を把握しようとしても無理だった。

ここはどこだ？ そんな考えはとっくに捨てた。分からないから。もうどれくらい経ったのだろう。分からない。だって、時間というものがないから……

突然、光が見えたような気がした。俺はもうこんな所はうんざりだったから、光の方に手を伸ばす。そして……

「ここはどこだ？」

が、まずは第一声。そして、俺を中心に360度全てが人で囲まれ

ていた。いかにも農民くさい服装が7割、どこかの貴族のような服装が3割、そして巫女のような服を着た少女が1人。

「あつ、あなた様が勇者様でよろしかったんですね？」

俺の目の前で跪いている少女がそう言い出した。この子は当然可愛かった。まあ、このパターンは分かっているので王道に、

「そうだが？」

俺の一声で、目の前の山が割れました。そりや派手に、パカーンと。

「なっ、なにーっ!?」

これも俺。そして今度は、すぐ近くに地割れが走った。

[illegible]

俺も含めて俺の周りにいた全ての人が黙り込む。そして、俺の自慢の輝く白い歯を見せて笑うと。

「こいつ……魔王だーっ!!」

「おい、リン。お前、魔王を召喚したなっ!!」

そんな俺の努力も虚しく悪者になっちゃった。しくしく。そして、俺の目の前で少女が責められ始めた。

「わっ、私は言いました。勇者様の召喚なんか頼ってはいけないと！」

俺の目の前で、激しい責任の擦り付け合いが起こっている。俺は、全員に攻められ始めたリンと言われた少女を助けるために口を開いた。

「その少女は俺が預からせてもらう!!」

俺の後ろの山で火山が噴火した。ものすごく脅してるように見えてしまうのは俺だけだろうか？

「はっ、はいいい！ どうぞ持って帰って下さい。もう、煮るなり焼くなりエロい事でも何でも！」

「不束者ですが、どうかよろしくお願いします！」

えっ、俺って何か間違えたかな？ リンって子を助けるはずだったのに、どうしてこんなことに？

農民みたいな人たちが、リンをこちらに放り投げる。俺はリンをお姫様抱っこして受け止めるとリンはなぜか気絶してしまった。それに俺は少し腹が立ってしまったので、マンガで言うなら額に怒りマークが浮かんでいると思う。

「ぎゃ————っ!!」

リンを放り投げた人たちが次々に泡を吹きながら気絶していく。えー、思っただけでもアウトなの？

俺はとりあえずリンをお姫様抱っこ状態で移動する。囲んでいた奴らには一睨みすると、目からレーザービームが出てきたので文字どおり蹴散らした。

そして、俺の行く宛てのない旅が始まってしまった。

不本意な召喚（後書き）

主人公の名前が出てこない。なぜ!?

多分、次に出ています。

初めての勇者（前書き）

冒険のスタートです。

初めての勇者

勢いである場所を離れてしまったことを俺は後悔した。だって、わけのわからない森をもう3時間ほど歩いているのだから！

10分程前にリンが目を覚ましたが、助けてやった俺に怯えてさっきから俺の横で泣いている。女の子を泣かす奴は許さないと常々考えている俺だが、原因が俺ではどうする事も出来なかった。

（喋ると何が起るかわからないし………めんどうだー）

それでも、何も進歩がないというわけじゃない。何もしてこない俺に、リンが勇気を持って喋りかけてきたことだった。

「ご迷惑でなければ、魔王様のお名前をお聞かせ願えませんか？」

俺は答えてやりたがったが声に出すとどうなるのかわからないので、テレパシーってやつを試してみることにした。

（俺の名前は、無花果 赤（いちじく あか）。俺の名前は、無花果赤。通じるかな？）

「無花果赤様ですか？」

（おおっ！！ 通じたぞ！ これで会話することが――）

「変わった……おにやまえふえすねえー」

（ん？ あれ？ 今、最後の方がおかしかったような。しかも、な

んかふらふらしでしたぞ!」

リンがいきなり呂律ろれつが回らなくなり、体も危なっかしくふらふらし
でした。え!?!　なに、また俺のせい?　そして、

「魔王様は、なにフエチなんですか?」

そして、俺は転けた。危なっかしくふらふらしていたリンの体が元
のようにシャキンとしたと思ったら、予想の斜め上を行った事を言
い出したから。というか、テレビで見ているアレみたいに自然と転
けてしまえるだな・・・・・・

そして、俺が転けた代償は大きかった。地面に巨大なクレーターが
できてしまった。

(隕石でも落ちたようなクレーターが!?!　リンは突然できたクレー
ターに驚き、そして落ちていく。俺もだけど)

俺は空中でリンを抱えると肩に担ぐ。そして考えた。

ファンタジーの世界ならもしかしたら空飛べるんじゃない?　なの
で、つい出来心で試してみる。

「えい」

そう言って、何もない空中を蹴った。そして気持ちは大空にピョー
ンと・・・・・・

「ドーン!」まるで大砲を打ったみたいなのがして、真上に向か
ってものすごい速度で上昇していく。そして思った。

（空飛ぶのって、ちっとも楽しくない!!）

冗談はこれくらいにして、空気抵抗で俺の肩に担いでいたリンが「ぼぼっ!?! ぼおー!!」とわけのわからないことを言っているの
で、空気抵抗が無いように回収しておく。

（はぁ・・・・・・ 世話の焼ける女だな、こいつは。）

楽しくない空中飛行にも終わりが見えてきた。肌寒くなったなあー
と思っていると勢いが無くなり、下に落下しだしたからだ。ちな
みにリンは凍り付いていた。

地面に無事に着地できた俺は、絶賛気絶中のリンを木の根元に寝か
しつけ休ませることにした。俺の中ではリンは可哀想な女の子と言
う位置づけなのだ。

あらかじめ言うておく。俺は違うが、魔王パーティはめんどくさい
勇者に出会ってしまうのが世の常である。そして、勇者グループが
勝負を仕掛け、勝利するか負けても見逃してもらうパターンが多い
が。

休憩しだしてしばらくすると、人の声が聞こえてきてだんだんとは
つきり聞こえるようになっていた。

「今日の手柄は巨大魔物1体だなんて、今日は魔物が少なかったな
あ」

「気にすることはありませんよカートさん。明日はもっとたくさん

狩れますって!」

「そうだ! 気にすることは無い。俺たちのコンビネーションにか
かれは魔王だって怖くないさ!」

「そうだぜ! いざとなりや俺様の弓で一発——」

そんな事を言いながら、その4人組は俺たちが休憩しているところ
に足を踏み入れた。そして、弓を持って先頭を歩いていた男が——

「ぬうお——っ!?!」

いきなり炎上^{えんじょう}しだした。

「シアン——っ!?!」

3人の声が重なる。そして、魔法使いらしい格好をした青年が魔法
を使って炎を消火し、シアンと呼ばれた男のを寝かせ回復魔法?
を使って回復させようとし始めた。

俺は考えた。体格のいい大男と、魔法使いのような格好の青年、ま
だ顔に幼さを残す青年と、今さっき突然燃え出したキザっぽい若者。
明らかに勇者だと思ふ奴らに出会ってしまった。絶対に面倒なこと
になる。その前に、俺はこの場から立ち去らないと。

「あっ!」

見つかってしまった。まだ幼い雰囲気を残す青年が1人こちらに気
が付いた。あっ、やっべー

「お前が魔王だな！ シアンの仇。成敗！」

（なんでピンポイントで言い当ててくるの！？ なに？ それが勇者の勘なの？）

「そうです！ この人が魔王なんです！」

気絶していたはずのリンがいつの間にか起きて、勇者たちに向かってそう言った。おいっ！ 助けてやった恩を忘れてぬけぬけと・・・

「人質まで取るとは・・・汚いぞ魔王！」

「この腐れ外道がっ！！ 恥を知れ！」

（これは違う。違うことは違うとはっきり言わないといけない！俺は否定することにした。）

「いや、それは——」

「ぎゃ————っ!？」

「レクラスーウ!？」

「貴様！ 回復魔法しか使えない。戦うことのできないレクラスを真っ先に狙うとは・・・この外道!！」

（あれれ？ 俺の評価が勝手に悪くなっていく？）

残っていた2人が武器を構える。大柄の男の方は巨大な斧だった。いかにも手入れをしていますという風にピカピカだ。もう1人、青年のほうは剣を構える。意外と隙の無い構えだった。

「いや、ちが——」

「うぎゃ————っ!？」

「マゼンターア!？」

大柄の男が叫びながら倒れた。青年は大柄の男の傍で跪くと、

「貴っ様ーっ!! マゼンタまでも! この敵をとってやる!!」

(ええーっ!! これ、俺の意思関係ないよ!)

「死ねーっ! 魔王!」

丸腰の俺は刀で切り込んでくる勇者に対抗できない。とっさに、両手で顔を覆い隠す。

「ぐはぁ————っ!？」

両手を上げた風圧で勇者が吹き飛ばされ、木に叩きつけられた衝撃で満身創痍の状態になった。

「くそっ。腐っても魔王と言うわけか!」

(ああ、もう! 收拾がつかんぞこれ。俺は願った。誰か、解決策をーっ!!)

初めての勇者（後書き）

一応、勇者たちは死んでいませんよ。

それと、次でこのちょっとした戦いは終わる予定です。

決着（前書き）

戦え！！ 赤よ！

お前の冒険は始まったばかりだ！

変な前置きで始まります。

決着

俺は何もしていない・・・していないはずなのに、俺の目の前には倒れている勇者がいち、にい、さん、しい。あれ？　ちよつと目頭が熱くなってきちゃった・・・

俺の目の前でカートと呼ばれた勇者が起き上がり剣を構える。

「勇者様ーっ！　頑張ってください！！」

（おいリン！　応援するほうがおかしくないか？）

「行くぞ魔王！　これが俺の最高の技だっ——」

「待ってくださいカートさん！」

「！？　レクラス！！　無事だったのか！」

「ええ！　しかし、このとうりボロボロですがね・・・」

（なに？　このゲームの終わりみたいなシーンは！？　完璧に誤解されてるよね、これ？）

「あなたでは相性が悪すぎます。ここは私が」

「すまないレクラス！　俺が不甲斐ないばかりに・・・」

「気にしないでいいですよ。それに、それがあなたの良い所でもあります」

「レクラス——っ!!」

（なにこの茶番劇？ 俺が魔王だったら攻撃してるよ！ リンもう
なずきながら涙流してるんじゃないぞ！）

「フッ、魔王よ。私が長年かけて開発した異次元魔法——」

「——その味をとくと味わいなさい！」

そう言ったレクラスの手ひらに、黒い禍々しい球体が出現する。
右手と左手にあった黒い球体を目の前で重ね合わせる。すると、合
成された球体がビー玉ぐらいの小さい玉になった。

レクラスは右手にその玉を持ち、振りかぶりながらその玉を俺のほ
うに「えい！」と言いながら投げてきた。

どうでもいいが、前置きが長すぎないかレクラスよ。と、俺は思っ
た。そして、のんびりと様子を見ていた俺は、その玉をかわすこと
なく喰らってしまった。

黒い玉が俺の腹に当たった。その瞬間、玉が引力を持ち物凄い力で
俺を吸い込もうとしてきた。物理法則を無視して俺は玉の中に吸い
込まれて始めた。似たような体験はちょっと前にしたが、またそれ
とは違う感覚だった。

「おおっ!？」

俺がそう言う間に、小さな玉に勢い良く吸い込まれ始めた。吸い込
んでいくのはいいが、当たった場所が腹なのでサバ折りみたいに吸

い込まれていく。なので……俺はものすごく痛い!!

「サバ折りい——っ!?」

(80℃くらいならまだいい!　だがこれは、0℃だっ!!)

「っ——!!」

(もう痛すぎて声が出てこない。そしてようやく全身が吸い込まれた。助かったーっ!!)

そして……目を開けるとそこは闇だった。右も闇。左も闇。上も下も全てが闇の世界に送られてしまった。助かったと思っても、そこは異次元。痛い思いをしてたどり着いた場所がこんなところでは話にならない。

「どうやったら出れるのこれ?　レクラスは脱出方法を教えてくれなかったからなあ……」

勇者が教えてくれるはずはないが、考えるよりは行動だろう。適当に進みだが、闇の中では意味のない行動だった。それでも進む……

一方、勇者たちは。

「よっしゃあ——!!　俺たちで魔王を倒したぜ!!!」

この通り、ものすごく興奮していた。そして、魔王に人質にされていた金色と表現するより黄金色のようなショートな髪と今まで聞いた事も見たこと無い、髪と同じく金色の瞳をした美少女に自己紹介をする。

「俺はカート。こっちの大男がマゼンタ。こっちの金髪のキザな感じなのがシアン。君の後ろで、笑っているのがレクラス。君の名前はなんていうんだい？」

カートと呼ばれた男が自己紹介を始めた。そうすると、リンも自己紹介をするのが礼儀だろう。

「私の名前は、リンって言います。魔王の被害が拡大していく今の現状を阻止しようと、勇者様を召喚したのですけど………何かの手違いで魔王が召喚されてしまって——」

「——私はその魔王に、俺の物になれてって言われてしまって………」

このように、リンは自己紹介と経緯を語った。それは、聞くだけでも恐ろしいものだった。なに！？　喋っただけなのに山が割れただど！？

「まさか、俺様たちで最強クラスの魔王を倒せるとは思っていませんかったぜ！」

今回何もしていないシアンは上機嫌になっていた。まさか、自分が立ち上げたギルドのメンバーで、魔王を倒す日が来るとは思っていなかったからだ。

「お前は何もしていないだろシアン！　今回はレクラスが一番の功
労者だ！」

「分かつてるよマゼンタの旦那。ちゃんと取り分はレクラスが多く
なるようにするさ」

「あっ！ それよりもお嬢ちゃん。なんで魔王と一緒に居たんだ？ その服から見るに、どこかの城から攫われたのか？」

「そうそれ！ その事を俺もずっと考えていた。あの魔王はリンちゃんみたいな可愛い女の子を集めているのかな？」

「あつ、私こう見えてもパラドックスで雇われているんですよ！」

「なっ！ あの王族都市のパラドックスでか！？ あそこは超一流の者しか住めないと言われているが・・・しかも、そこで雇われるとは・・・」

そんな風に、思い思いの会話が進んでいく勇者たちだが、その様子をリンを看病をしながら見ていたレクラスは、言ってはいけない一言漏らした。

「いやー、異次元に魔王を送ったのですから何も証明するものがないですねー」

この世界のギルドでは、魔物などを退治して賞金を得るのなら、倒したという証拠として体の一部などを持ち帰り、証明することがギ

ルドでの賞金受け取りになる。そして、誓約書の第一条にそう書いてある。なので、持ち帰らなければいくら倒したとしても賞金はもらえない。

「なっ!？ ど、ど、どうするーっ?」

「な、なに落ち着け! どこかに髪の毛一本でも落ちているさ!」

「おいコラ! 俺様だけじゃなく、お前らも目を凝らして探せーっ!」

「お、お————っ!」

(やれやれ……魔王の髪の毛一本じゃ普通は証明できないでしょう? 相変わらずバカな人たちですね……)

血眼になって地面を調べていく勇者たち。その様子を見ていたリンは、少しでもかっこいい人たちだと思ってしまった自分を恥じていた。

「だめだー! 見つからん!」

「くそ!! どうかして見つけろ!」

そんな時、古い扉が軋むみたいに「ぎいーっ!」と音がして、勇者たちの目の前、なにも無い空間からいきなり赤が現れた。

「ぷはっ!! お前ら良くもこんなことを——」

晴れていたのに、出てきた瞬間に雨が降り始め、雨が降る中、勇者たちの文句を言っていたところで勇者に邪魔される。

「いたぞーっ!! 魔王だ! 身包みを剥げーっ!!」

「緊急連絡! 緊急連絡! 魔王を発見した。繰り返す。魔王を発見した、至急殺しに来てくれ!!」

「なっ!?! 私最高の魔法がっ!?!」

1人だけ驚いた勇者がいたが、他の勇者は目が血走っていた。

(えっ!?! ちょっとまって! 状況を整理する時間を!!)

さっきまでは、俺に怯えていたはず勇者たちは殺気全開で俺に襲い掛かってきた。

(身包みを剥げ? 何があったらそんな状況になるの!?)

「うっ うおおおお!! お前らどこか行け——っ!!」

血走った目の勇者たちは本気で怖かった。身包みだけじゃなく、皮まで剥がされそうな勢いがある。そして、俺が取った行動はやはり間違っているのだろう。しゃがみ込んでしまったのだ。

しゃがみ込んだ。そして、1秒・2秒・3秒・4秒・5秒。いくら経っても勇者たちの剣が俺にとどく事はなかった。いや、目を開けると勇者たちが俺の目の前からいなくなっていた。

「・・・・・・・・?・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・???・・・」

そして思った。俺の声には理解することの無い力があるみたいだ。願いの？ 願望？ とりあえず、俺がそうなって欲しいと思ったとおり、勇者たちは一瞬の間に消えていた。

俺が思ったから俺の目の前から勇者たちが消えた。勇者たちはどこに行ったんだ！？ これで、一件落着でいいのか？ 俺は疑問に思っただけで固まっていたが・・・

今までほったらかし状態だったリンが俺のそばに來ながら、バタバタと軽く手を振って隣に並ぶ。そして暢気に喋りだした。

「悪い勇者たちはいなくなりました！ 魔王様さすがですっ！！」

「私は初めから分かっていました。勇者に攫われた私を、魔王様が助け出してくれることを！！」

うむ。こいつバカだろう！ しかし・・・いや、バカだな。

勇者側に寝返っていた裏切り者のリンは、数秒の間にこちら側に戻ってくると、そう言ってきた。なので思った。

（勇者の事は面倒だから、いいか・・・）と、

決着（後書き）

異世界に来たのに異次元へ：

何があったのかをいつか書きたいと思っています。

あと、パソコンが壊れたままなので、更新が遅くなると思います。

我慢（前書き）

まったく話は進みません。

我慢

俺の一言で勇者がどこかに消えてしまった。本来ならば悲しむところかもしれない。しかし、俺にはそんな余裕はない。だってここは、ジャングルみたいな場所だから……

俺は勇者が消えた後、勇者たちが野营地として選んだ場所で俺とリンはこのジャングルから抜け出すための準備をしていた。準備といっても道具の整理だ。

「魔王様！　勇者が忘れていったたいまつなどがありますが、これ全部貰っちゃいましょう。後で役に立つはずです」

「地図————はないみたいです。はあ、勇者と言ってもたかが勇者か……」

（うん。リンはいつの間にかたくましくなってるぞ。いつの間に成長したのか？）

俺が変な世界から戻ってからはしばらくすると、リンは俺に少し慣れたみたいだった。今までみたいに、3メートルほど後ろを離れて歩いたり、近づいたりするのではなく、すぐ隣にいるようになっていた。

さらに、俺が危害を加えないと分かってきたからはリンはよく喋りかけてくるようになった。それに、俺が喋ると良からぬ事が起こると黙認しているのか、頷いてしか会話をしない俺にも嫌な顔をしない

かった。

「魔王様って怖い御方かと思っていましたけど、本当は優しい御方なんですね！」

リンが満面の笑みで俺にそう言ってきた時には、ドキツとしたしものすごく嬉しかった。しかし……

「大勢の人がいたあの場で、俺のものになれだなんて……魔王様って大胆ですよー——」

この思い込みの激しさと、さっきできたクレータよりも深い勘違いは止めて欲しい。これは俺の切実な願いである。

勇者が野営していた場所には、たいまつや縄など冒険には欠かせない道具が置きっぱなしにしてあったので、罪悪感を感じながらもありがたく頂くことにした。勇者たちはどこに行ったのだろうか（実際には、いなくなってしまったと言うのが正しい）

置いてあった袋に道具を詰め、これから向かう進路を適当にきめる。地図があったのなら簡単にこのジャングルから脱出することができたが、生憎と勇者の荷物の中には地図はなかった。

「魔王様ーっ！ これは何ですか？」

勇者のカバンの中をあさっていたリンは何か分からないものでも見つけたのだろう。手に持って俺に見せてくる。

「なっ!？」

それはエロ本だった。なぜ勇者が持っていた？ 誰の持ち物だろう？
というのは後回しにして急いでそれをリンから回収する。

リンは不思議そうにしていたが、こんな教育上よろしくないものは俺が大事に預からねば!! 急いでポケットにしまうと、立ち上がる。

「それは何ですか？」

しつこいリンを手振り身振りで追い払う。

(リンにはまだ早い。俺のような立派な高校生が持つてこそ真価を発揮する!)

勇者の荷物を全て調べ終わると、ようやく冒険が再開となる。長かった・・・

そして、また冒険へ!! と、行きたいところだったが何せ場所も地理もわからない。その頃には頭の良い俺は、地面に文字を書いて話ができるという大発明をしたが、この世界と俺がいた世界では使われている文字が全然違ったために、リンと結局会話は成立しなかった。

なので、言葉が喋れないままリンとあてもない旅が始まってしまった。俺はこんなジャングルみたいなどころから早く出たい! というのが俺の気持ちだったがリンも同じらしい。しかし、いくら歩いても出たいどころか川すら見つからなかった。

だが、それよりももっと気になったのが、横ではお腹が空いたのか、リンがその辺になっていた果物らしきものを食べていた事だった。ちなみに果物の色は紫色。

「うー？　あまり美味しくないですね」

（こら！！　のんきに食べないで早くその紫色の毒々しい果物を吐き出さない！　ダメよ、め！！）

毒々しい色の果物を食べるリンを見た瞬間、これって絶対毒入りじゃないのかな？　と判断。ヤバいと思って止めさせようとするのだが、気がついたときが遅かった。

案の定。俺が思ったとおりリンはいきなり倒れ、痙攣しだした。

（あー、これは神経毒が含まれていますね・・・　たぶんもうしばらく麻痺状態が続くでしょうから、バカは肩に担いでいきましょう。）

俺はリンを肩に担ぐと、荷物を手に持ち準備万端となる。しかし・・・

「うっ・・・うううあああ」

（リンが唸りだしたぞ！　これって危ないんじゃないか？）

（薬草ってどこに売っているのかな？　もしかして、勇者が持っていたわらみtainのがそうなのかな？　俺には判断ができなかったので現状維持だ。）

「あああああ。いいいい。うううううう」

肩に乗せて運んでいたリンがうるさい。普通に会話ができるくらいに回復してきたか確認のために声に出してこのような事をしているとも取れるが、麻痺が治っていないので俺には「引きずって歩いてください」と言ってるようにしか聞こえない。

「んんまあままああ——」

マ行に入ってきたあたりでウザさが本気でヤバくなってきた。このままだったら俺は、リンをそこら辺に生えているわけのわからん木にぶつけながら進むことになってしまう。耐えるんだ！ 俺！！

「んんんんっ——」

（よし、最後に入ったーっ！ よく耐えたぞ俺っ！）

「——んんんっまあままああ」

足をつかんで引きずりながら進むことにした。

（俺がんばって耐えたんだよっ！ でもこいつ、ウゼーんだもんっ
！！）

こんな事がありながらも、俺は進む事を止めなかった。そして、代わり映えのしないこのジャングルの出口を求めて旅をする。旅は好きだし、ジャングル生活数時間だが、もう飽きた。出口に向かって

いる気が全然しないからなあ

しかし、次第になぜ俺をこんなところに召喚したのかを考えるようになっていた。

なぜ——こんな辺境で俺を召喚しようと考えたのか、俺を召喚したバカ達の考えることは分からないが、たしか魔王が進軍を始めたといっていたな。そうだ！ 疑問がもう1つ。この世界って勇者がいっぱいいるじゃん！！

俺を召喚する必要のなさど、なぜか勇者として召喚されたのに魔王扱いを受けている俺はどうしたら良いのだろう？ この気持ちをどこにぶつけて良いのか分からないので、とりあえずリンを恨んでみた。

一瞬………瞬きをした間に、俺から円状に半径5メートル圏内は全てのものにとてつもない重力が掛かったかのように倒れていたので、一時の感情で流されるということは、俺の中でタブーにしようと思う。

しかし、肩が妙に軽くなったなと思っていたらリンがいつの間にか地面にうつ伏せで倒れていた。寝るのは勝手だが、もう少し考えたほうがいいと思う。

倒れたショックなのか、リンは麻痺状態から回復したようだった。ああ！ 最初はどこのお嬢様かと思うほど弱々しかったのに、こんなに逞しくなって………父親のような気持ちで見ていると、

「ひ、ひどいじゃないですか魔王様！！ 私なにもしていませんのに、引きずって歩いたり落としてみたり」

それについてはお前が悪いとまでは言わないが、かわいそうだったので頷いておいた。

「それに私のお尻を触ったり、撫でたり……………ああっ」

（いや、さわってねえーっ！！ 俺は俺の無実を証明する！！）

「分かっています。分かっています……………私の体が魅力的なことくらい！」

（俺が喋れないことを良いことに、完璧におかしな展開になってしまったっ！ これって、後から訂正しても大丈夫かな？）

（リンはこんなキャラじゃなかった気がするが、何か成長することがあったのだろうか？ しかし、ジャングルの中で自我自賛する美少女って痛いなー）

恍惚の表情のリンを肩に担ぎ、さっさと歩き出す。こんなジャングルのの中では野宿はしたくないぞ！

しかし、このジャングル攻略は一筋縄ではいかない。なにせ、さまざまな脅威が俺たちに襲い掛かってくるのだから。たとえばリンとか——っ！

我慢（後書き）

- まだパソコンが壊れています。なので、次回の更新がいつになるか
-

けものみち(前書き)

パソコン復活！

なので、きちんと投稿していきたいと思います。

けものみち

「あの魔王様「バチッ」いつになったら「バチッ」ここから抜け出せるんでしょうか?」「バチッ」」

分からないので俺は首を横に振っておく。

「それにしても「バチッ」ここってどれくらい「バチチッ」広いんですかね?」

これも分からない首を横に振っておく。大体リンが分からないのだったら俺はもっと分からない。

「はぁ・・・「バチッ」お腹空いてきました「バチッ」何か食べませんか?」

(俺はお腹は空いていないんだけどな。まあ、リンがお腹が空いたんじゃない仕方がない。)

そこら辺に生えている。食べてもいいか分からないような食べ物を食べ歩きしながら歩いていたリンは、お腹が空いたと言う。仕方ないので、カバンからパンを取り出して餌付けする。

「んっんーっ!!」「バチチッ」美味しいですーっ!」

(そりゃ良かった。お腹が空いたら戦はできないとまで言うし・・・)

「バチッ、バチッ、バチッ、バチチッ――」

（我慢。我慢だ俺！！ これくらいのことでは集中力が切らされては、昔おこなった寺修行が全て無駄じゃないかっ！！）

俺はここら辺まで、正確に我慢できていたことを覚えている。しかし、ここから先は我慢できなかったと記憶している。

「うるせーっ！！」

俺の本気の怒鳴り声で、目の前にいた恐竜のような生き物が、こんがりお肉に一瞬で変わったことは申し訳ないと思う。しかし、目の前の恐竜みたいな生き物はお肉に変わっても、本当にイラついた生き物は今もご健在である。

『虫』

と、呼ばれる生き物がこの場合イラついた原因の生き物に当てはまる。

時間は数分前にさかのぼる。

「魔王様見てください！ ほらこれって、獣道じゃないですか？」

（は？ 獣道？）

リンが、うつとうしいほど植物が覆い茂る場所を指差す。

俺は指差されるままそちらの方向に視線をやると、一見分かりにくい、確かに獣道だと思われる草の上を通ったという跡が残されていた。

俺とリンは獣道を見つけた。これはアレだな、ゲームで言ったらレアダンジョン発見と同じくらいの価値があるんじゃないか？ 売れないかなあ、この道・・・

しかもその獣道は人間の足跡がついており、どう考えてもここを通りましたっ！ という揺ぎ無い証拠と、このジャングル脱出の近道になると俺とリンは思った。

「魔王様っ！ この獣道に沿っていけば、ここから出るのもきっと簡単ですよ！」

（言わずもがな。もし、ここが俺の住んでいる世界だったら、俺の大好きな爪楊枝をたくさんリンにプレゼントしようじゃないかっ！）

俺もその意見に賛成だったので、迷わずその獣道に入っていく。今までは少し開けたところを選んで通っていたけれど、この獣道もはや道じゃなくただ単に草むらだ。

獣道と言っても、よく目を凝らさなければ道を外れてしまうほど曖昧な獣道だった。リンはよく見つけられたなと感心しながら進んでいく。

（あー、獣道をたどって脱出するという考えはまったく思い浮かばなかったなー もっと早く思いついておけば、俺たちは苦労しなか

ったのかもしれない。」

「そうです！ 魔王様はここから出ることができた後、どこに行くんですか？」

（あっ！！）

リンはいつもの調子で言ったのだろう。しかし俺は、今までその事をまったく考えていなかった。

（や、ヤバいぞ俺！ まさかここから脱出することで頭がいっぱいで、それからのことを全然考えていなかった！）

俺がどうしようどうしようと考えていると、唐突に「バチッ」という音が俺の後ろあたりからした。俺は音がしたほうを振り向き、リンは「びくん」と驚きながらも音がした方向を振り向く。

後ろを振り向いたはいいが、そこには何も見当たらなかった。俺は首を傾げながら、何が起こったか確認しようとするもまた「バチッ」と音がする。

「ま、ま、魔王様ーっ！ 何が起こっているんですか！？」

（いや、こっちが聞きたいぐらいだ！ 本当にどうなっているんだ？）

俺とリンの周りには何もいない。にもかかわらず、俺とリンの周りで今も『バチッ』という音が聞こえてくるのだ。俺とリンの周りには虫しか飛んでいないというのに……ん、虫？

俺はひとつの考えを思いつくと、飛んでいるある一匹の無視を注意深く観察することにした。

「じーっ」「バチッ」

（ああ、なるほど。そういうことだったのか……）

音の正体は虫だった。俺の周りに虫が近づこうとすると、俺の周りが殺虫灯のような効果があるのか、本当の殺虫灯のようにバチバチと虫が死んでゆく。

まさか俺は、超ハイテクな殺虫機能まで手に入れてしまったようだった。

「ま、まおうさまぁーっ」

（えっ？）

その時、リンが弱々しい声を出しながら俺の服をつかんできた。しかも少し涙目でだ。

（もしかしてまだ虫がこの音の原因だってことに気がついていないのか？ それだとしたら、リンは随分と怖がりということになるぞ。）

俺はリンが安心できるように、手でも握ってやろうとしてぴたりと止まる。「ぐうるるっ!!」リンのほうからお腹がすいたと言いたいのか、お腹の声が聞こえてくる。

（自己主張の激しい奴だな。まだカバンの中には何か食べるものがあったと思うが・・・・・・）

そう思い、カバンの中を覗こうと思っていたのだが、見なくてもいいような別のものを見てしまった。

「ぐるるるっ！！」と声を出しながら、でかい大木のような足が目の前にあった。

三本指のその指先には鋭く尖ったつめ。生まれてくる場所をどう間違えたのか知らないが、間違いなく恐竜のような生き物だった。

まるで恐竜のようなその足の存在に気がついてしまった俺は、リンが何に対して恐怖していたか理解した。と同時に、俺とリンは現実逃避を開始した。

「まおうさまー 今日もいいお天気ですねー」

（うんそうだな！ 曇っているけどいい天気だ！）

「それにしても虫が多いですねー」

（そうだな。このバチバチという音に気がついてくれないと嬉しいけど、たぶん無理だろうなー）

（俺とリンの絶妙なコンビネーションの前にしては、目の前の恐竜みたいな生き物なんて、紙切れと同じようなものだっ！）

この発言自体、もう最大の現実逃避であるということは俺は理解し

ていたが、なぜかその事実を拒むかのように理解することができなかった。

けものみち（後書き）

こんがりお肉はスタッフが美味しくいただきました。（赤・リン・作者・勇者などなど）

それと、便利なアイテム。獣道を発見したのでこれからの旅はスムーズになると思います。

リンと蜜（前書き）

獣道を歩き始めたリンと赤。今回は、2人が獣道を歩いている途中のお話。

リンと蜜

このジャングルではいろいろと厄介なものが多い。この場所で生活をしている者ならなんともないのだろうが、俺たちはこんなところで生活をしたことがなければ、歩いたこともない。

「歩きにくいですよね魔王様。このぬかるんでいる所とか、覆いかぶさるように茂っている植物とか」

（そうだな。歩きにくくて仕方がない。）

この世界の住人のリンなんかは、俺よりはましだろう。なにせ、俺はつい数時間前まで高校生活をエンジョイしていた平凡な高校生なんだから。

（いや、ごめん訂正。俺、エンジョイしてたって記憶はないや・・・）

（しかし——俺の幼馴染は今どうしているのだろうか？　もしかしたら俺のことを心配してくれ——るわけではないか・・・幼馴染だというのに、嬉し恥ずかしイベントは起きないし、歩くATMとか言ってクラスのやつらに自慢するくらいだし、）

（ああっ！！　なぜだろう。目頭は熱くなるし鼻からは水が出でくるし、今日は体調が悪いのかもしれない。やっぱり、俺のボロボロになってしまったハートを癒してくれるのは、問題多きリンしかない！）

少し自分の世界にのめり込みてしまい、帰り道がわからなくなり始

めていた俺を助け出したのは、リンの声だった。

「たっ、たす・・・助けてーっ!!」

（いや、俺の勘違いのようだ。）

俺がリンの姿を捜し左右を見渡す。声がした方はこちらのほうだったが、そこには何も見当たらない。それでも目を凝らして捜す、するとリンはすぐに見つかった。しかし――なぜか首だけだ・・・

「あうううう」

リンが首だけ出して情けない声を出している。こんな状況だが、リンが可愛く見えてしょうがないのは俺だけか？

しかし・・・どう表現したら良いのだろうか？ 食虫植物のウツボカズラと言えば分かりやすいのかもしれない。あの落とし穴のような形状のものが大きな木の上からたくさん茂っている。

（あー 何度見ても気持ち悪いな。しかもリンの首だけ出ているから、打ち首にあった人を飾っているようだぞ。）

どう考えても自分から入っていかなくては引っこかりそうにはない形状なのだが、なぜかリンが引っこかっている。しかも、頭だけ残して全て掴まっているようだ、これは今すぐ助けないとほんとにヤバそうだな。

「こ、これネペンテスですっ！　そうじゃないかと思っていたのにあの甘い香りに誘われて――はっ！　私はなにをしていたのでしょう！？」

（俺に聞かれても困る。しかし、それだけ喋れるならば十分だな！　しかし、どれだけ丈夫な奴なんだか・・・・・・）

「とける。とけちゃうー　魔王様早くう」

たまに――リンを放置して置いたらどうなるかと思うことがある。いつも厄介ごとを持ち込むリンだが、それでも大切な奴だ。

考えるよりも先に体を動かしリンの救出を開始する。リンが捕まっているネペンテスの下に回りこむと考えなしに、下からネペンテスに手をつっ込み穴を開ける。

「きゃっ！！　気をつけてくださいよ魔王様！」

（注文の多い奴だなー　助けてもらうんだから文句は言わない！）

「ズッ」そんな音がして手がすんなり貫通した瞬間、俺の選択が間違ったと言うことに気がつかされた。

まず、俺が手をつっ込んだことによってこの植物には気の毒なことに、大きな木全体が上に持ち上がり根っこごと地面から抜けてしまった。

それだけなら良かったのだが、大きな木が徐々に浮き上がり気球のようにフワフワしながら空を漂い始めてしまった。

（おおーっ！！　これは素晴らしい！！）

リンを忘れてその様子を見た俺は、心のメモリアル『俺をオークションするなっ！！』の思い出の出来事編に保存しておくことにした。思い出って大事だからね。

ペテンテスの下に穴が開くならば当然重力に従ってリンが落ちてくる。しかも、落ちてくるものはリンだけではなかった。

「あっ！」

（おおっ！？）

リンが間の抜けた声を出しながら空を浮遊している大きな木から落ちてくる。その高さは十分に高い。俺はリンが怪我をしないように真下に移動し身構えておく。

そして、リンをお姫様抱っこしてキャッチした俺の上から、大量の甘い香りのする酸が降ってきた。バケツをひっくり返すような音が出て、俺とリンは酸を頭からかぶってしまった。

（なにこれ？　あぶねえ！！）

酸が地面に落ちるたびに「ジュッ！」と、地面が溶けるような音が出る。

俺は、俺ならもし当たったとしても大丈夫かもしれない？　と思っていたとおり、なんともなかったのに対してリンは、

「いたっ！　いたい！！　痛いです魔王様っ！！」

（うるせーっ！　少しは黙ってろ！）

リンに酸がかからないように、俺がリンに覆いかぶさって酸の雨をやり過ごす。こいつにも少しは酸がかかっているはずなのに、痛いと言うだけで見るからに元気だった。

（地面が溶けるほどの酸が少しくらいリンに掛かっているっていうのに、どうしてこいつはこうも平気なんだ？）

俺がリンと旅をしてリンの事を知って驚いたことの多くは、その丈夫さだった。俺は今回も丈夫さに驚いていると、

「うー。痛いすう」

（丈夫な奴だな。）

本来なら、痛いじゃすまないような怪我をしているはずなのに、みずばれしかできていない。これは丈夫だというカテゴリーからリンを外して、新しくリンという規格外カテゴリーを作るべきだろう。

俺が1人でそんな事を思っていると、たった今助け出したリンがネペンテスという植物の説明をしてくれるという話にいつの間にかなっていた。

「獲物を甘い香りで誘い込み、誘い込んだなら短時間でその蜜を酸に変え獲物を溶かしてしまう。これがネペンテスの大きな特徴です」

（なるほど！　これでリンの意味不明な行動が理解できる。）

リンの奇行を目撃している俺は、この植物の効率のよい捕食方法に感心する。

「そして——そんな生態を持っているこのネペンテスという植物は、よほどお腹が空いて幻覚まで見始めるくらいにならないと、旅人にとって迷惑な生き物ではないそうです」

（幻覚っておい！ 普通は引っ掛かっちゃダメだろ！ リン、思いつきり引っかかっているじゃん！）

それなのにリンは引っかかっていた。どれだけ食べ物にこだわりのあるのだろうか？ とても俺には計り知れないことだった。

リンと蜜（後書き）

次回、二人の身になにがつ！？

という、お話にはなりません。

空と武器（前書き）

旅の必需品の出現！！

やっぱり、冒険と言ったらこれでしょう！

空と武器

唐突に、リンが一言

「気球みたいになったネペンテスで、脱出してみてはどうでしょう！」

（そうだな。空から捜せば、簡単に脱出できるじゃないかっ！）

「ネペンテスに乗っていれば歩くことも疲れることもなく、瞬く間にジャングル脱出ですっ！」

（いいぞいいぞー）

「そして、それが復讐です！！」

（え、ええーっ！？）

俺はリンの思いつきに乗っかり、このリンの一言で、俺とリンの冒険はさらに加速し出口に近づいたと思う。

俺はリンを小脇に抱えると、力加減を考えネペンテスに飛び乗る。歓迎されているのかいないのか、俺は一発でネペンテスに飛び乗る

ことができ、リンはネペンテスから落ちそうになった。

「気をつけてくださいよ魔王様！ 私は、レディなんですよ？」

（恐ろしいほどに丈夫なレディがいるわけないだろう！？ 俺の考えるレディは、もう少し大人しくてか弱いものだ！ お前はかけ離れているぞ！）

なんでこの世界に来て最初に出会った奴がこんな奴なんだ？ と、俺が真剣に悩みだしたころ、大きな木を観察していたリンが何か見つけたのか、俺の服を引っ張る。

「改めてみると大きな木ですね・・・あつ、あそこで休憩できそうですよ」

（おっ、そうだな）

俺たちが飛び乗った木は相当大きく古い木だったらしく、ちょっとした広場のような場所があり、そんな場所に俺とリンは腰を下ろし、大きなあくびをする。

「「ふあああつ」」

俺たちのあくびに合わせて心地よい風が吹く、すると、どっと疲れを感じる。頭が重く、体がだるくなってきた。

俺とリンは、お互いに初めての事が多すぎて、ずっと緊張していたということも関係している。

「はあゝ 楽ですねー」

（そだなー）

「こんなに楽でしたら、お昼寝がしたくなりますねー」

（そだなー）

「お昼寝といえ、お腹が空きましたねー ご飯にしましょう！」

（そだなー）

そう言うと、リンはバックから食べ物を取り出す。干し肉やパンにワインなど、さまざまな物を詰め込んでいるバックは、俺たちを退屈させず、お腹を満たしてくれる。

「うーん、美味しー！！」

（干し肉って意外と美味しいな。）

俺とリンは本当にのんびりとご飯を食べる。パンや干し肉を頬張っている俺とリンは、地面から5メートルほどの空を低空飛行するネペンテスの木の上に座って、のんびりと空の旅を満喫していた。

唐突だが、動力不明。飛行能力不明。なぜか俺の思ったとおりに進んでくれるという、スペシャル特典付きなこの乗り物。

昔、ネペンテスという名前が付いていたこの大きな木。今は、俺と

リンを運んでくれる遊覧船。その名も『空と武器』という。リンは

「こんなものに名前はなくともいいですっ!！」

と、まだ恨みを持っていてみたいだったが、俺は首を振ってそれを否定する。そして、俺は何か良い名前はないか考える。

「えー、じゃあ『空とぶ木』でどうですか？」

（うーん。いまいち……）

俺はまた首を振ると、ようやく良い名前を考える。そうだな……『俺のモノ』とかどうだろう？ 身振り手振りで表現したが、今度はリンに

「ダメです！ そんな名前では！」

（じゃあ、どうすりゃいいんだよっ!?!）

「んー、では『空と武器』で」

（それならいいかなー）

と、こんな経緯でこのふざけた名前が付いたが、この空と武器には立派な武器が搭載されている。

なにを隠そう、この木に生えているネペンテスが自立した意思を持ち始め、なんと勝手に動いて捕食をし始めたからだ。最初に気がついたのはリン。俺も気がついたときは驚いた。

「きゃっ!？」 ネペンテスが動いていますよ魔王様!」

俺にそんな事を言ってきたけどどうにもならんぞ。俺がそんな事を思っていたとき、

「どしどし」と、なんだか大きな足音が聞こえてきた。何事かと下を覗いた俺は、ある修羅場を目撃する。それは、恐竜みたいな大きさと形をした生き物とネペンテスの激しい戦いだった。

いきなりネペンテスが動き出したかと思うと、下を歩いていた恐竜のような大きな生き物にネペンテスが果敢に立ち向う。

俺は乗せてもらっている恩があるので、自然とネペンテスを応援してしまう。そして、恐竜みたいな生き物とネペンテスの、激しい戦いの火蓋が切って下ろされた。

ネペンテス本人は、捕食が目的なのだろうから真剣に立ち向かう。しかし、相手が悪かった。なんと3秒で逆に捕食されてしまった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

無言になってしまった俺とリンは、何事もなかったように食事を再開する。

そして、この経験を得てほかのネペンテスは、比較的小さな獲物を襲うようになった。別にどうするもこうするも俺たちには関係ない事などで、気にしていなかったら思ってもいない大変なことになってしまった。

どうもリンの味を染めたのか、リンが好物らしいネペンテスは何かあるとリンを捕食しようとする。

「いやああああっ!!」

「止めて下さいっ！ わたしは食べられません！ 美味しくありませんー！」

「ちよっ！ 魔王様っ！ 見ていないで助けてくださいっ!!」

そういつて必死に抵抗するリン。しかし、

「あああああーっ!!」

と絶叫しながら頭まで見えなくなった時には、さすがに助けに入った。

この空と武器は全て俺の意思でも動かせるらしく、俺がネペンテスにリンを食べるなど命じると、あま噛みをするほどに大人しくなった。

例えるならば、大人しく忠実な犬である。（植物だけど………）

リンはそれでも嫌がっていたのでスキンシップだ！ と、表現して納得させる。納得はしていなかったがそう割り切ってもらった。

そして、しばらくすると・・・

空と武器（後書き）

文がおかしい気がします。すみません…

文章力UPのために、武者修業に出てまいります!!

今日一日（前書き）

話は進みません。それどころか、これからという所で止まります。

今日一日

「あ、あれっ!？ 魔王様、あれってジャングルの出口じゃないですかっ?」

(なんだとーっ!?)

俺はリンの声を聞き、閉じていた目を開け薄暗くなってきた夕焼け空に目を細める。そして、遠くから見え始めてきた、うっそうと覆い茂るジャングルの林に終わりがあることを確認する。

(ま、まさかあれはっ、伝説の出口!？ こんなところでお目にかかれるとはっ!)

「ま、まさかあれはっ、伝説の出口!？ こんなところでお目にかかれるとはっ!」

(おおっ!! 俺とリンのセリフが一致した!?)

「急いでくださいネペンテス! 向かうところはあのジャングルの終わりですっ!」

(そうだ! 善は急げ、だ! 頼んだぞネペンテス!)

俺がネペンテスにそう呼びかけると、俺の呼びかけに答える様に、少し速度が速くなった。このままのペースで行くならば、完全に日が落ちる前にジャングルの出口にたどり着くはずである。

俺が推測するに、このジャングルは地平線の彼方まで続いている。もはや終わりのないジャングルだ。などなど、いろいろとマイナスな事を考え諦めていたりもしたが、今、こうして終わりがあることを実感することができた。

（よかったあ。これでこんな所からおさらばできる。）

俺がジャングルを抜け出すためにしてきた苦労を思い出していると、リンが卒業式のお別れのようなノリで話しかけてきた。

「本当に・・・今日はいろいろなことがありましたね」

（そうだな。思えば今日一日いろいろなことがあった。）

俺は今日の出来事を思い出してみる。はあ、平凡なあのころに戻りたい・・・

今日もいつもと同じような一日のはずだった。幼馴染に起こされ、幼馴染に窓から落とされる。生きていることのすばらしさを実感しながら学校に向かう。そんな日常。

しかし今日は、幼馴染に殴られ蹴られ、鼻血に足を取られるという恥ずかしい出来事から始まり。ゲームのような非日常の世界に召喚されたと思って浮かれてみたら、俺の一声で山が割れてしまう。

（その後、火山活動が始まってしまったという話を聞いた）

そのせいで、召喚された俺の勇者な冒険が始まらない。それどころか、ろくに喋ることもできない。しかも、望んでもいなかった力のせいで魔王とよばれる始末。

（人を見かけなどで判断するのは、いけないことだと思うぞ！）

醜い争いを繰り返すリンを助け出したと思ったら、勇者グループと出会い、リンはそちら側に寝返るし、何もしていなかったはずなのに、勇者に出会った瞬間殺されそうになる。

（まったく！ 人の命を何だと思っているんだか！）

俺は手も足もだしてはいない、丸腰だったというのに、勇者が勝手に倒れていくという爽快感と罪悪感。しかも、盛り上がっていた勇者には、逆に申し訳ないと思う目にあわせてしまい……

（今頃、あの勇者たちはどこで何をしているんだろうか？ 今度あったら謝りたいな……）

そして、俺がこの世界に来て初めてであった女の子。リンはとても可愛い女の子だけれど、なんかいろいろと残念で……

（可愛いのに……可愛いのに……なんか残念だ）

今も俺の隣で『ぬうおお！！ 私が負けるはずがないっ！！』とか言って、虫相手に逃げ回っている。

普通だったら、召喚された主人公が次々と面倒ごとに巻き込まれる

という王道を突き破る、まさかのリンがその巻き込まれ役で。しかも、助けるのがいつも俺。

（何か特殊なフェロモンでも出しているのかな？）

「ばかなっ！？ まさか飛んで攻撃してくるですって！！」

（・・・・・・楽しそうだなあ）

極めつけは、俺のこのでたらめな力。この力のせいで、俺は自分の行動を大きく制限しなくては、日常生活に支障をきたすと言っても過言ではないほどに、事態は深刻だ。うむ、実に息苦しい！

（これまでは、人に心配をかけるところじゃなかったからいいけど、ジャングルを抜けたら、人が住んでいる場所になるらな）

「む、虫が虫が——っ！！」

（あっ、死んだかな？）

俺は——始めて、力が強すぎても何もいいことがないと知った。世界征服なんかを企む奴にはいいかもしれないがな。

（この力を使って、何か良いことをして名を残すような偉大な人物になるか。それか、傍若無人に振舞って、逆の意味で名を残すか・・・・）

「私の死体は・・・風に結んで空に上げてください。そして私は・・・私は・・・夜露死苦・・・」

(リン——っ!?)

(夜露死苦なんて悪い言葉どこで覚えてきたの!? 戻れっ! お前はまだ、残飯処理の役目を果たしていない!)

リンに襲いくる虫の脅威を左手一本で追い払い、無残にも、リンが食べるはずだった残飯で絶命している虫の群れにお礼をいい、力尽きているリンを起こす。

様子を見てみていた限りでは、ただ単に、お腹が空いていたリンがつまみ食いをしようとして、それを狙った虫とひと悶着があったというだけの話だった。

お騒がせな奴にはご飯抜き! 俺はリンに一番有効なお仕置きをすることにした。勝手に食べ物を食べようとするからそうなる。

俺はリンが、唇の尖らせながら文句をたれる姿を想像して、別にこの旅は嫌じゃなかったと思った。

今日一日（後書き）

次は、進むと思います？

赤犬（前書き）

念願のジャングル脱出です。

赤犬

リンが力尽きてしまったため、旅は終わりを迎えた。なんだか壮大な言い方をしてしまったが、実際にはただ、長々と続いていたジャングルの終わりにたどり着いたと言うだけだ。

旅の道ずれ、リン！　なんだか頼りになった空と武器！　そして、自称天才で頭脳明晰、女の子なら誰しも振り返り声をかけてしまうような、無花果　赤！

ゲームにも出て来そうにない変な仲間を引き連れた俺は、とうとうやり遂げたのである。ジャングルからの脱出を！

ジャングルから出た俺たちは、もう日が暮れていたなので、出てすぐの場所で野営をすることになった。運がいいことに川がすぐ近くにあり、水には困らない。

自ら志願し、水をくみに出かけた俺は水をくんでいると、後ろからうなり声が聞こえたので振り返った。

そこには、体長30センチほどの小型なオオカミのような獣がいた。そいつはうなり声を上げながら俺に襲い掛かってきた。が、俺に歯を立てた瞬間、歯が溶けて泣いていた。

可哀想なので撫でてやったところ、体が一回り巨大化。体を覆っていた毛が燃えるような赤色になり、溶けてなくなってしまった歯が復活。見事なレベルアップを果たしたオオカミのような獣は、見事

に俺に懷いてしまった。

「クンクウン」

（かわいくなっ！）

俺はそんな事を思いながら、オオカミのような獣の頭を撫でてやっていた。しばらくすると、頭を上げ耳をピクピクと動かし始めた。そんな様子を見た俺は、何かいるのかな？ と、思って周りを見渡してみるとそこには、オオカミのような獣がいた。

さて、ここでひとつの悲しい物語が発生する。

オオカミのような獣（今は違う）のお母さんが子供を引き連れ現れた。お母さんのほうは体長1メートルくらいだったので、あれが大人になったこいつらの姿だろうと思いをめぐらせていると、

「クンクウン」

お母さんが子供を心配するように、鼻先で匂いをかぎながら赤犬（命名）の体をしきりに舐めだした。まるで家出息子を心配するような仕草だったので、しばらく様子を観察することにした。

お母さんに続いて、兄弟たちが赤犬の元に現れる。兄弟の数は3匹、赤犬を入れると4匹だが。お母さん犬がホッとしている中で、兄弟たちは謝っているようにも見える仕草をしていた。その様子を見た俺は、多分こんな事があったのだらうと勝手な推測をする。

物語1、赤犬と兄弟たちで、度胸試しでもしようと言いだしたのだろう。そしてお母さんに内緒で度胸試し開始。そして、野生の生き物の世界なのだから内容は必然的に、獲物を仕留められるかだろう。兄妹がお母さんということは、仕留めることが出来なかったのは赤犬だけ、それをバカにした兄弟たちに、でかい獲物を仕留めてくるとでも言ったのか、赤犬は再度獲物探しに、

なかなか見つからないので、こんな遅くになってしまい、ようやく獲物として俺を見つけて襲い掛かったら自滅したのだろう。兄弟たちは、帰ってきたお母さんに事情を聞かれ、つつい話してしまい怒られた後とかそんな感じかな？

物語2、親子の感動の再会。めでたしだな！

俺はのほほんと、勝手に物語を作って楽しんでいたが、視線をいくつも感じてあのオオカミ親子の方を見た。

赤犬、飼い犬のような、自分の主でも見るような目で俺を見てくる。

お母さん、獲物としか思っていない、食欲な目で俺を見やがる。「はっはっ」と、規則的に吐いている呼吸から、「にがさねーぜ、獲物ちゃん！」とでも言いたいのか、時折ウインク。

兄弟ズ、基本的に母親と同じ目。ただし、「ふん・・・哀れ！」みたいな目で時折見やがるのは、さすがに腹が立つ。

そんな家族の様子に気がついたのか、赤犬は、家族となにやらめ
だした。

お母さん「ワンッ、グフッ、グルル」

「うへっ、あそこに美味しそうな獲物があるわ」

赤犬「ワン、ワン、ワオー」

「ダメだよお母さん！ あの人には僕の大切な人なんだから、そんな
ことしちゃ」

兄弟ズ「ワン、ワオオッ」

「えーさー えーさー えーさー ギロチン！」

（何言っているのかわからないので、翻訳してみましたー！ いや、
こいつらアブねっ！！）

（しかも、兄弟ズはお母さんよりも怖い！？ お母さんどんな躰を
しているの！？）

兄弟ズが怖くなったので、両手を抱えガタガタと震えていると、赤
犬が心配そうに俺の元にやってきて、その赤色で暖かい体を俺に摺
り寄せてくる。まるで、『安心していいよ』とでも言いそうな赤犬
の仕草は、優しさに満ち溢れている。

しばらくすると、赤犬が暖めてくれたおかげで俺の震えも納まる。
それを確認した赤犬は、家族に向かってお別れのような声を上げる。

赤犬「アオーン」

「さようならお母さん、兄弟！ 僕はこの人についていくよ！」

お母さん「アオーン」

「いってらっしゃいー！」

兄弟ズ「アオーン」

「えさあああ——！！！！」

それぞれが別れの言葉を残し去っていく。赤犬は決意をこめて、お母さんは誇りを持って、兄弟ズは未練たっぷりに——

置いていかれた俺は、とりあえず水をくんで、野営地の戻ることにした。

赤犬（後書き）

赤は、水くみだけしかしていお話。

しかし・・・人間じゃない仲間がさらに増えた・・・

第一人者（前書き）

投稿が久しぶりなのを申し訳なく思う作者です。現在、リアルのほうが急がしく投稿が遅くなってしまうました。気をつけたいと思います。

第一人者

『ただいまー』

水をくみ野営地に戻ってきた俺は、手を上げながらリンにそう挨拶をする。挨拶は日本人の美德とまで言うらしいから、俺はこの世界に來ても日本人の誇りは忘れていないと言うことだ。

夜になる前に薪を集めていたが、集めた薪を火にくべすぎて簡易的なキャンプファイヤー状態になっているせいで、俺たちの野営地は昼間のように明るい。赤々と燃えている火のそばにリンは腰を下ろしており、俺の方に驚きながら振り返る。

「ムグッ!？」

「あ、あっお帰りなさい。本来魔王様に頼むようなお仕事ではないと思うんですが、お腹が空いてしまつて……先にいただきます」

（うん、素直なのは良い事だと分かっているが、ここまでストレートに言われたならば悪意があると思つてしまうな……）

俺はそう考えながらリンの横に腰を下ろした。腰を下ろした俺の横に赤犬が腰を下ろし、遠くから見ればなかなか絵になると思ったが、口には出さない。リンはご飯を食べるのに夢中で、赤犬ことには気がついていないようだった。

（さて、晩御飯だ!）

キャンプファイヤーのごとく燃え上がっている薪の横に、丸く囲むように石が並べられ、その中心では鍋が置かれてあり何かを煮込んでいるご様子。

晩御飯はなんだろうと考え、俺は胸いっぱい空気を吸い込み晩御飯の内容を当てることにした。こんなド田舎のような場所ではこんな小さなことも楽しみの一つになる。

『すう……』そんな音が聞こえてきそうなほど大きく息を吸い込んだ。

(むっ……カレーかつ！)

俺は自慢ではないが料理ができない。ちなみにリンも料理ができないが、これだけあきらさまにカレーの匂いがするのだ、リンはカレーくらいは作れるのだろう。

米がないのでカレーとはいかないが、パンくらい残っているはずである。パンと一緒に食べるのも悪くない。食べ物なんかを詰め込んでいた袋を開け、なにがあるかな？ と、覗き込んだ俺は驚いた。

(ないっ！？ なにもないっ！！)

『バツ！』俺は急いでリンを振り返る。『バツ！！』リンは全力で俺の視線をかわしやがった。

(どうする？ 何もないぞっ！ もしかして今日はカレーのルーだけで、この飢えをしのがなくてはならないと言うことか！？)

(いやしかし、ルーがあるかないじゃ全然違うぞっ、まだ俺はいい

ほうなのかもしれん。ルーしかないがまだ幸せ者だ)

そんな事を考えながら鍋のふたを開けてみる。たくさん残ってくれていると嬉しいのだが……

『パカッ……』

(なっ!? 何もないだ!? 冗談なのか? あっいや、レトルトカレーだ。なぜかレトルトカレーがあるぞ!)

温められたレトルトカレーを鍋から取り出し、手に取りながらワナワナと震える。いろいろ言いたいこともあるが、今は我慢。

そして、レトルトカレーから感じる暖かさからは、しばらく会っていない母親の記憶がよみがえってくる。

いつもポケットの中にレトルトカレーを忍ばせていた母。三食毎晩レトルトカレーでも文句を言わせなかった母の威圧感。俺の運動会の日には知らない間にズボンに縫いつけ、激しく動く中身がこぼれると言う恐怖に耐えながら走った100メートル走。

そして一番の思い出は、いじめられて帰ってきた俺を温かい笑顔で励まして、母さん特製カレー風呂に入ったときの記憶は忘れない。次の日は、お前カレー臭せーよっ!! と、学校の生徒全員からの暴言の嵐だった。

駆け込んだ校長室、優しく迎え入れてくれる校長先生。しかし、すぐに追い出しやがった公務員! 仲間を求めて逃げ込んだ鶏小屋ではエサじゃないのに、突かれるっ!

思い出すと泣けてくる、俺のなんだか辛く切ない小学校時代。カレーとともに学んだ6年間、俺は今やカレー愛好家の第一人者まで上り詰めた男だ。カレーには・・・・・・・・カレーとは・・・・・・・・愛するものだっ！！

気がつくと思考が別の世界に飛んでいったようだ。手の中にあつたカレーはすっかり冷めており、胃袋は空腹を訴えている。

急いでレトルトカレーの封を切ると、流し込むように口の中に注ぎ込む。こんな食べ方しかできないのが悔しいが、意地と根性で何とか我慢。

（中辛か・・・・・・・・俺的には辛口のほうが良かったが）

そんな感想を考えながら、口を動かしていると何か違和感があることに気がついた。口の中や体がではなく、俺から見えている周りの景色がだった。

リンがない——赤犬がない——そして、少しずつ景色がぼやけていく。体が傾くを感じる。しかし何もできない。

「まお・・・・・・・・まっ！ ま・・・・・・・・さま！ ・・・・・・・・・・・・・・・・」

遠くから呼んでいる声が聞こえる・・・・・・・・気がした。

『パチッ』そんな気持ちの良い音とともに俺の目が覚める。右にリン、左に赤犬、真上にネペンテス。ほかに何もいない、当たり前だが。

「あっ大丈夫ですか魔王様っ!？」

「大丈夫だっ! 心配するなリン」

「あれ・・・？」

「どうした? 何かあったのかリン？」

「あっいえ、魔王様がいつもと違う感じがして・・・」

「???」

何か異変? 何か異変———そういえば湧き上がるような力が感じない。それどころか、だんだん小さくなっているような気がする。

俺は『ハッ』っとなって体を起こした。力が———魔王の力が消えているっ!??

第一人者（後書き）

赤の魔王の力の消滅っ！？

幼なじみ（前書き）

幼なじみの話です

幼なじみ

『あかが教室でだんだん沈んでいくという謎の病気にかかった。』

ので、わたしは誰でもいいから助けを呼びに行くことになった。赤に頼まれちゃったからしかたなく、誰か助けてくれそうな人を捜しに行こうと思ったわたしは、誰を呼ぶかで悩んだ。

「誰を呼ぼう？　せいと？　でもなー、せいとだといまひとつ面白くないなー」

そんな事を考えながら廊下に出たわたしは、ちょうど廊下の先から歩いてくる担任の先生を見つけた。

（先生を呼んだら大事になって面白いかも！）

「せんせー」

「？　どうした幼なじみちゃん？」

幼なじみちゃんとはわたしの名前じゃないんだけど、赤が有名すぎて幼なじみのわたしは、幼なじみちゃんなんてあだ名が定着しちゃってる。

「あかが変なことにあってるんですけど、今回はヤバそうなんのでついてくれませんか？」

足が沈みだす病気なんてあったけなーとか思っちゃたけど、実際にあったんだから仕方がない。

「ヤバそうなこと？ あいつは毎日がそんな感じじゃないか。いまさら気にしても直るもんじゃないだろう？」

「そうですけどー なにかこう、教室の床に足がめり込んでるんです」

「なにっ!？」

「あいつとうとう教室の床にまで穴を開けるようになったのかっ！くそ！ 次そんなことをしたら職員室に軟禁するって脅しておいたのにっ!！」

(ふふっ いい感じいい感じ♪)

「それとせんせー、あかのやつ教室の床を水で汚してましたー」

(まあ、あかの鼻血なんだけどね)

「あいつ………屋上で監禁だな。屋上で干物になればいいのに………」

(あはっ！ 面白くなった)

「あっせんせー、いまあかは教室にいます。急いでいって現場を押さえましょう!」

「バカな生徒(特に、無花果 赤)は、天井から吊るさないと直らないからな——先生だから説教するのは当然のことだな」

そこまで話したわたしと先生は、赤が助けを求めている教室に向かった。なるべく早く助けに戻ろうと思ったけど、意外と先生と話しかんでてしまった。

『ガラッ』そんな音を立てて教室の扉を開く。わたしが先陣をきって教室の中に入り、その後続くように担任の先生が教室の中に入ってくる。

「? あか?」

「??? あいつはどこにいるんだ?」

わたしが教室を離れてまだ5分も経っていない。それなのに――赤がいた場所には赤がおらず、赤の周りかなりの範囲で広がっていた血だまりも消えていた。

『消えていた・・・・・・』

わたしは教室のすぐ目と鼻の先にいた。しかも、教室の様子が分かるように位置を変えて先生と話をしていた。だから分かる。赤は教室から出ていない。

教室から出ていないのにいない。まるで神隠しにあったように・・・・・・まるで誰かに意図的に消されたかのように・・・・・・無花果赤という存在を感じない。

「・・・・・・」

わたしがしばらく無言になっていると、教室の中を軽く見回した担任の先生は言った。

「うーん。あいつ逃げたのか？ まあここは3階だがあいつの身体能力ならば、窓から外に出てわずかな足がかりで脱走するからなあ」

「とりあえず——次に見かけたときは職員室に連行だな！」

先生は独り言のようにそれだけ言うと、「俺は職員室に戻るから、あいつを見かけたら職員室に来るように言っておいてくれ」と、わたしに言って教室から出て行ってしまった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

わたしは無言で赤が沈んでいた場所に近づく。鼻血のあとは綺麗に無くなっている。赤が座っていたイスを触ってみる、もうそのイスからは赤が座っていたという暖かさが感じられない。

「えー。どこいったのかなあ」

独り言を呟いていると「キンコンカーン」と、パツとしないチャイムの音が聞こえてきた。

「もう帰る時間・・・・・・・・」

わたしはおもむろに立ち上がった。すると、クラツとめまいがして目の前が真っ黒になる。

「貧血？」

体は強いし貧血になるような要因は見当たらない。それに、貧血ってこんなにも足元がおぼつかないものだったなんて。

なんて余裕を見せていたわたしは視界がはっきりしてくると、見えている景色がまったく違うことに気がついた。

高い高い。わたしがいた教室の3階から見下ろす景色じゃない、5階くらいの高さはある。そして、見下ろす景色もまた日本の、わたしが住んでいる町の景色とはまったく違う。

広大な大地。点々と、堂々と生えている巨木。飛んでいる鳥は近所で見かける鳥よりも10倍は大きい。そんな場所の巨木の枝に、わたしは立っていた。

幼なじみ（後書き）

新章みたいなものにいきなり突入です

女神様（前書き）

幼なじみの話？

しばらくは続きます

女神様

「あつれー？ どうしてこんなところにー？」

こんなところに上った記憶はないし、こんな場所はテレビでも見たことがない。しかも、植物も動物もみんな大きい。

いまいち状況を理解することが出来ていないわたしは、夢だと思い寝ることにした。おやすみなさい。

「ぐわーっっ！！」

折角寝ようと思ったのに大きな声に邪魔される。しかも、今時ぐわーだなんて。わたしは少しイライラしながら片目を開けた。

「ぐわっ」

（うわっ！？）

目を開けると、大きな鳥がわたしを突こうと振りかぶっているところだった。

「きゃ——！！？」

必死に転がり回避したわたしは、大きな鳥のくちばしが巨木の枝（わたしがいる場所）に刺さるのを見て、気がついて良かったと安堵する。

が、『みしみし・・・バキッ』大きな鳥のせいで巨木の枝が折れてしまった。

「ばかぁー!!」

わたしはありったけの気持ちをこめて暴言を吐きながら自由落下。大きな鳥は優雅に飛んでいってしまう。

「ちよっ!？ 枝折っておいて自分だけ逃げた!」

(あの鳥――後でお仕置き。わたしが生きてたらだけどねー)

地面に付くまでに時間はかからない。数秒のうちに地面についてペシャッってなるかな。いやだなー

そんなことを考えているくらいだから、わたしはまだまだ余裕があった。

そして・・・・・・気がつくのと体の内側からなんともいえない力が無尽蔵に湧いてくる。その力は何でも出来てしまいそうなほど圧倒的で、全てを魅了するほど魅力的だった。

別に誰かに言われたわけではない。誰かに習ったわけでもない。でも、私はその不思議で強大な力の使い方を知っていた。そして、手足のように使役する。

「よっ・・・・・・っ」と

頭から地面に向かって落ちていたわたしは、クルクルと回転して『タンッ』っと、空気を地面のように踏む。そしてそのまま……・わたしは空中で当たり前のように立っていた。

「……………なんだろうこの力？ 体の底から力が湧いてくる。何でもできそうな気がするなー」

「フフッ……………あははっ」

なんだろう、笑いがこみ上げてくる。なんだか分からない世界に來たけれど、この世界でも上手くやっていけそうな気がする。いまでもと同じように、楽しく愉快に。

そして、まだ2階ほどの高さがあるのに関わらず、地面に向かって飛び降りる。その様子を見ている人がいるならば、空から女の子が降ってくる。そんな様子を見たら、神々しく見えているだろう。

「おいあれっ！！ ちょっ、お前らあれ見ろよ！」

「あっ？ なんだよ？」

「なっ空から女の子が……………」

「どうして空から女の子がふってくるんだ？」

「も、もしかや女神様？」

「そんなわけないだろう？ 女神様なわけが」

「見てみるよ、ほら。あの女の子光ってるぞ！ 絶対女神様だよ！」

「はっ？ どこが……」

『ピカ——ッ！！！』

「女神様が俺たちの前に現れた——っ!？」

意外と人はどんなところに住んでもやっていける。たとえば、どんなにそこで生きている動物が大きくても、どんなに変わった弱肉強食があろうとも。この場所に住んでいる、のうのうと生きていた人々は、空からふってきた女の子を見て女神様と思った。

赤の幼馴染だった女の子が、女神様と呼ばれるようになった瞬間だった。

「ここはどこなんだろう？」

降りる途中で一瞬光ったが、どうして光ったのか分からないのでひとまず保留。

地面に降りたわたしは周りを見渡す。そして見渡す限り特に何も無い、そんな場所でわたしは絶対的な、例えるならば魔王のような力を手に入れた。

「女神様！」

しばらく考え事をしていたわたしの背中に向かって、声をかけられたわたしは後ろを振り返った。ステップを踏むように後ろを振り返るとそこには、30人ほどの老若男女さまざまな年齢の、農民だろう人々がいた。

（女神様？ それってわたしのことかなー）

素朴な疑問だった。世間的にも年齢的にもただの高校三年生が、どう間違えられると女神様となるのだろうか。

（老若男女の熱い視線と、私以外に誰も女神様に該当しそうな人物が周りにいないことから推測したら、私のことを女神様と呼んでいることは間違いないのだけれど……どうして？）

そんなことよりもいま一番重要だったことは、ここはどこであるかなんという場所なのか。どうして植物や動物が異常なまでに大きいのかを知りたかった。

そして、わたしの視線に気がついた若い男が、わたしに向かって歩きながら語りかけてきた。

女神様（後書き）

幼なじみがいる場所は、山や川もある以外に綺麗な場所です

巨木の民（前書き）

幼なじみの話？

巨木の民

「俺たちはここに住んでいる、巨木の民と言うものです。ここは動物も植物も俺たちの2倍以上大きい。そんな中で生活している俺たちは今、何とか生活できている状態」

「女神様。生活に困っている俺たちをどうかお導き下さい」

わたしに近づいてきた男はわたしの手前で跪き、そう言ってきた。その男につられて周りの人々も同じようにわたしに跪く。

「――「どうかお導く下さい」――」

そして、今度は跪いている人々全員で同じセリフを言ってきた。そんな人々にわたしが言うセリフは決まっている。

「あ？　なにいつてんだ？　馬鹿か？」

「わたしがなんでそんなめんどくさい事をしなくちゃならない？　わたしに助けを求める前に自分で何とかしろ！」

「――「女神様がご乱心だ――っ！！」――」

わたしが返した言葉に巨木の民の一同が同じセリフで突っ込んできた。そこは同じ民としての一体感がある。仲良しこよしの一族らしい。

わたしはこの一族のどうでもいいことに感心した。こういう一体感があつたりノリがいいのはわたしは嫌いじゃない。これこそまさにわたしの格好のおもちゃだ。

「えっええ——。なんか女神様が怖いんだけど……」

「もしかして——いまの言葉の中に女神様なりの活路の開き方が紛れ込まれていたのかもしれん」

「いや、俺たちで解決しろってしか言っていないぞ！」

「バカヤローツ！！ お前たちは女神様を疑うのか！」

体格のよい男がそう言った。その男は少しタメを作ると、握りこぶしを作り語りだした。

「女神様はなあー女神様は、俺たちに貢げと言ったんだ！」

「えっそうなのか？ そう言えばそう言っていたような気がする。お前は頭がいいな」

「当たり前だろう、なんたって俺なんだからっ」

「おおー。お前サイコーだよ！」

（巨木の民って、ちょっとバカが多いなー バカな会話だ）

「そうすると——女神様には何を貢げばいいんだろうか？」

「チョコか、アメか、バナナか？　しかし、バナナはおやつに含まれないだろうか？」

「俺はバナナはおやつ代わりに食っているから、おやつだと思うな
ー」

「いや、私はバナナなんて食べないから分からないけど、バナナっておやつのように包装されていないじゃないか。だからバナナって、おやつだと思うんだよ」

「うむ。バナナはおやつ。それでいいだろう。みんな異存はないな
？」

「「「うん」「」」」

「よし、では貢物の話に戻る」

（貢物って……わたしはそんなこと一言も言っていないけどなー。まあ、面白いからそのままにしておくけど）

「で、だ。貢物にするものだが、なにがいいと「まてっ」っ!？」

（あっ、なにか現れた）

「そんな小娘の言葉に騙されるでない。お前たちは誇り高き巨木の民だろう？」

そんなことを言いながら、1人の老人が遠くの巨木の陰から現れ、歩いてくる。足取りがおぼつかないけど、なんだか人に影響力を与

えるような、族長のような雰囲気だ。

「族長っ！　ワシの話を聞け！」

（あのおじいちゃん族長じゃないの！？　以外———というか、族長は最初に話しかけてきたあの男だったのか！）

おじいちゃんが族長と呼んだ男に向かって大声で話しかけた。族長のほうは、またかという顔をしながらゆっくりとおじいちゃんのほうに向き直る。

「ねえ………元族長。あんたもう死んでいるんだから、いい加減現実を見て成仏をしたらどうなんですか？」

「だまれ若造がっ！！　誰に向かって口を聞いている。享年101歳のわしに向かって！」

「いや、101歳も生きておいて、死んでもまだうろついているって———どれだけ未練があったんですか！」

（あのおじいちゃん101歳も生きていたの？　そっちのほうに驚きだなー　そういえば、少しばかり足元が透けているような気がする。気のせいかもしれないけどー）

若い男の族長の言葉に元族長のおじいちゃんは、ゆっくりと考える素振りを見せながら少しタメを作り、話し出した。

「未練はないが忘れ物をしての」

「忘れ物？」

(忘れ物?)

「うむ」

そう言って元族長は大きくうなずくと、少し言いにくそうな態度を取っていたが決心がついたのか、話し出した。

「わしのお宝・・・・・・・・巨木の民の娘の隠し撮りの写真集、じゃ」

「・・・・・・・・くだらねえ」

と、族長は言いました。

巨木の民（後書き）

次回は、宝探しが始まる…？

元族長（前書き）

幼なじみの話なのに、あまり出てこない……

元族長

「くだらねえー、早く成仏しろよ……………」

族長の若い男はこんな言葉を呟き続けていたが、現実逃避をしていたのは数秒間だけですぐにもとのまじめな顔に戻り、イライラしている様子で元族長のおじいちゃんと話を再開する。

「はあ……………その写真集をどうすれば、元族長は成仏するんだ？」

「うむ。わしはその写真集を一度墓場にまで持っていこうとしたが、もって行くことができなかった。だから、写真集を墓場まで持っていければ成仏すると思う」

「んー。写真集の場所を知っているのは元族長だけだし、元族長がそれを持って墓場に持ち込めばいいだけの話なのに。どんな問題があったんだ？」

（あつもしかして、幽霊特有のものを通過できるということの応用編じゃ……………）

「むっ……………そう、じゃな……………」

族長が状況確認のようにそこまで言うと、元族長はボソリと言い返した。

「掴むことが――できなかったのじゃ。このわしの両手では収まりきれぬ代物ではないと言うことじゃった」

「ああ、くだらねー」

（巨木の民はバカな人しかいないなー あつても、族長はまともそうだ）

元族長の話を聞き、しばらく族長は考えていたが、何か決心がついたのか顔を上げ巨木の民の人々に向かって話し始めた。

「そんなわけだからみんなは嫌だろうが、仕方なく元族長のお宝探しに行ってくれ！ それで迷惑な元族長が成仏してくれる。喜ぶことだ」

「――「まかせとけ」――」

「こらっ！ 仮にも元族長に対してなんと言う口の聞き方だ！」

（人気がなかったんだ、元族長ー）

元族長のつつこみは無視され、巨木族の民の人々は元族長の家に向かって歩いていった。すこし周りを観察していて分かったことだが、巨木の民の人々は巨木に穴を開けてその中で暮らしているようだった。思うに中はマンションのようになっていたのだろう。

「さて、話はその小娘のことに戻そう。わしは怪しいその小娘のことなど信用していない。わしら一族に災いをもたらすとわしは考

えている。族長はどう思う？」

巨木の民を送り出した後、急に話は女神問題に戻ってきた。元族長が話を元に戻したからだ。

「元族長が間違っていると思う。俺だけじゃなく、巨木の民の人々はみんな、この少女は女神様だと思っているな。そして、俺たちの事を救ってくれるということも信じている！」

（あー信じているまで言われちゃった。少し様子を見すぎちゃったなー どうしよう・・・）

「女神様っ！！ 今一度どうか俺たちのことを考えてください！お願いします！！」

そう言うのと、族長は跪き頭を地面につけてお願いをする。巨木の民の人々を元族長の宝物捜しに向かわせたのは、巨木の民の人々にこんな姿を見せたくなかったということもあるんだろう。

「うーん・・・」

私が困ったようなそぶりを見せた瞬間、元族長が動いた。

「くそ！ こんな小娘に頼るべきではないと言っているのに・・・
・・・ こうなったならば！」

そう言うのと、元族長はわたしのほうに向かって歩いてきて私を殴りつけるように拳を固めかぶりを振る。老いたクソ爺のくせに見事と言いたくなるほどその動きは俊敏だった。その様子を見た瞬間、族

長の男はすばやく動き元族長を羽交い絞めにする。

「なにをするんじゃっ、トリッジ！ お前は大人しくしておかんなっ！！」

「大人しくするのは元族長だ、オームさん！ 元族長は死んだっていうのに、物は触れられなくて生き物は触れることができるんだ、本当に迷惑なっ！」

「知らんわっ！ 気が付いたならそうになっていたんじゃから、仕方ないじゃろう。そういうものじゃ！」

「そういうものじゃ、では——ないっ！ それに今の元族長にはもう死んだ人という認識と扱いになっているんだ。それなのになんで俺たちのことに口を出す？ いくら元族長だからと言っても、今は若い世代が引っ張っている時代だ！」

「今、あんたが口を出すスペースはどこにもない！ あんたみたいな年寄りたちは、若いものが困ったときの相談役だろう？ 誰もあんたみたいに口を出してはこないぞっ！」

トリッジと呼ばれた族長の若い男がオームと呼んだ元族長のおじいちゃんにそうまくし立てた瞬間、元族長は頭から湯気が出るんじゃないかと思うくらいに顔を真っ赤にすると、急に全身の力を抜く。

「???? 分かってくれたのか？」

族長はそう言いながら元族長を放してやる。するとオームじいさんはフラフラっと、右に左に揺れたと思ったらいきなりこちらを向くと怒鳴りだした。

「わしは——まだ変身を10回も残しておる！ お前たちはわしを怒らせたことを後悔することになるぞ！！ 見せてやろう——わしの新の姿の、10ぶんの1を！」

「じーさん!?!」

（ぷっあはははっ・・・・・・・・ ばっバカだー！ あはははっ！）

元族長（後書き）

次回、元族長が変身します！？

変身（前書き）

族長はトリツジ。元族長はオーム。なら、幼なじみはなんて名前なのか・・・

変身

「はあ—————っ！！！　やあ—————っ！！！」

そんな声を出しながら、オームと呼ばれた元族長のおじいちゃんは力（気？）をためる。元族長の後ろのほうから『ごごごご』と、そんな音が聞こえてきそうなほどの剣幕だった。

「ちょっと元族長！？　冗談なら早めに止めたほうがいいぞ？　冗談じゃなかったら大型動物相手にやってくれ！　間違っても俺たちを襲うとか考えないでくれよ！」

トリッジと呼ばれた族長の若い男はあきらかに元族長に怯えきっており、逃げ腰になっていた。族長なのに………

「なんで『ごごごご』とか聞こえてくるんだっ！？　怖い。怖いぞ！！」

そして、わたしはというと………

「あはははっ、げほっ！？　けほけほ………あははははっ———」

と、腹を抱えて笑っていた。あまりにもバカバカしいことがつばに嵌ってしまった。

「ふん、小娘が笑いおって……今後悔するぞ。はあ——っ!」

『(い)い(い)い』

そんな音が聞こえてきたと思うと、「はあ!!!」と、元族長が全身に力をこめて声を出す。すると、『ピカー』と、元族長の体がどういう原理なのかは知らないが光る。元族長が光ったことで視界が光で覆われて、真っ白になった。

「うおっ!」

(わー 眩しいなー)

しばらくして視界が回復してくると、わたしたちが立っている場所に一陣の風が吹いた。そして、舞い上がっていた土埃などが風で流されてしまうと、肝心な元族長の姿が現れる。

「ふん、見よ!　これが10ぶんの1の力を出したわしの姿じゃ!」

そう言って元族長が自慢げに自分を見せつける。しかし——わたしがいくら見ても何も変わった様子がなかった。どこが変わったと聞かれたら、10人中10人が変わっていないと言うほどの変わってなさだった。

「???　おい元族長!　どこか変わったのか?」

そう族長が言うと、

「族長はとうとう馴れ馴れしくなってしまったな…….しか

し、見て分からぬかの？ わしの変化を、力を、美しさを」

「いや、全然」

（あっはっはあ……ようやく笑いが収まった。しかし、族長たち面白いな！）

元族長は自分の体の状態を確かめるために少しずつ触りながら、状態を確かめている。しばらく触っていたがどこか満足したのか、わたしたちのほうを向いてニヤニヤと笑っている。

「ふっ、やはり下賤な者にはわしのすばらしさが分からないと言うことかの」

「おいコラ！ 自分の部族の者をバカにしているんじゃないと言う」

（ちっ！ あのじいさんのニヤニヤ顔見ていると腹が立ってくる！）

わたしは元族長のニヤニヤ顔に腹が立ってイライラしてきたが、それは族長も同じようだった。

だからこそ、『元族長どうやってが痛い目に会わせようか』なんて真剣に考えてしまっていた。わたしがそんなことを考えているときには、もう動き出している者もいる。

「おいコラ元族長。あんまりバカにしていると、享年しているからって容赦しねーぞ！」

族長はそんな脅し口調で話しかけると、拳を構え臨戦態勢に入る。

見ただけで分かっってしまうが、あきらかに喧嘩慣れをしている者の構え方だった。

（族長だって若いからねー）

「まあまて族長！ お前が何に対して苛立っているのかは分かっているぞ」

「分かっているんだったらするなよ！」

（分かっているやってるなんて、意地が悪いなー）

「わしの素晴らしさが分からないから苛立っているんじゃない。教えてやろう。まずは肌、わしの肌が全体的に1%若返っている。そして髪、わしの髪が3%増毛によって、わしは今までの5倍は力が出る！」

そう言って元族長は髪を撫でつけ、髪を強調する元族長。あまりにも、ウザかった。

「知らねーよ！ それに増えたかどうかなんて分からねーよ！」

（増毛・・・・・・・・）

「ふっはは！ わしの素晴らしさが分からんとはなー」

元族長は自分しか分からない増毛で、自信を取り戻しさらにウザくなってしまった。今や元族長は、その姿を見た人と聞いた人をイラ

イラさせる。そして理解してしまう。

（族長としての人気がなかった理由が分かるな！）

変身（後書き）

幼なじみの名前が出てこず、話を進める上で幼なじみってだけじゃ、きつくなってきた。

次回、元族長とのバトルが決着

さらさらフラッシュ(前書き)

今回のサブタイトルは気にしないで下さい

さらさらフラッシュ

「今のわしに勝てる者はいない。なんたって無敵じゃからな、いくぞ！」

バトルマンガみたいなノリで、オームと呼ばれたおじいちゃんこと元族長は、わたしに向かって駆け出してきた。

「させるか！」

こちらと同じノリで元族長の前に立ちはだかったのは、トリッジと呼ばれた族長だった。何を間違ったか知らないが、私のことを女神様と呼ぶ困った人たちの族長だ。

気がつくとき、わたしを奪い合ってこんな展開になってしまった。みたいと感じるのは、この中では多分わたしだけなんだろう。

面白ければそれでも良かったんだけど……って言うのがわたしの本音でもあるから、たまにわたしが怖くなってしまう。（なんだろう？ 少し自意識過剰になってしまった）

やることもないし、争いはじめた2人を見るのも面白いかもしれないと考えて、しばらく2人の様子を見ることにした。

「小僧があああっ！！！！」

「おいぼれがあああっ！！！！」

とか言いながらも、『ポコポコ』と殴りあっているだけなので、決着がつかない。

「くたばれ！ 老いぼれ！」

「もう死んどるわ小僧！」

疲れてきたらしい2人は、だんだんと技が大振りになり、空振りばかりしている。

争う原因を作ったわたしが言うのもなんだが、同じ種族が争う姿を見るのはなんだか見苦しく感じてしまう。

「5%増毛さらさらヘアー、パンチ！」

「なんの、族長キック！」

「はっ、甘いわ。さらさらフラッシュ！」

くだらない攻防が続けていた2人は、ついに技名まで出した戦うようになっちゃった。わたしはその様子を可哀想に……なんて思っ
て見守る。

「さらさらフラッシュ×3」

「ぐうっ!?!」

「はっは、すきあり！」

「なっ!?!」

そして、意外にも早く決着がつくことになってしまった。

元族長の放った、さらさらフラッシュが族長の目くらましとなり、族長は元族長の一撃を貰ってしまった。その一撃が致命傷だったのか、膝から崩れ落ち気絶してしまう。

「あーあ」

まさか族長のほうが倒されるとは思っていなかったのも、驚いてしまう。わたしは族長が勝つほうに賭けていたので、まさかの太負けだ。賭け相手はいなかったが、意外とショック。

「ほっほっほっ」

わたしのそんな心境を知ってか知らないでか、元族長は笑い出した。

元族長からしてみれば、族長がいなくなったので後は小娘だけ。なんて考えているだろうが、わたしからしたらそんなことは分からないわけで、その高笑いわたしをちょっぴり怒らせるだけだった。

「どうしてこういう話になったのかは忘れてしまったが、とりあえずあの小娘を黙らせればいいとわたしの記憶が言っておる。すまないな」

そんなことを言って元族長はわたしに手をかけた。

瞬間——元族長が吹き飛ぶ。

「むっ!？」

10メートルほど飛ばされた元族長は、理解が出来ないという顔をしながらわたしに向き直る。そしてわたしをキッと睨むと、大声で怒鳴ってくる。

「小娘! おぬし今何をした? わしでも見えなかったぞ!」

「いやー 何をしたんだろうねー わたしも分からないや」

わたしはひとまずそう言うと、本当にどうなっているんだろうと考えた。

そういえば気がつかない振りをしてばかりいたが、空中で立ったり、光ったり、なんだか分からないけれど常に力が溢れかえっている。

動いてもまったく疲れないし、気分もいつもより高揚としていて何でもできる気がする。いつもよりも頭がスツとしていて考えがすぐにまとまる。そして――今まで気がつかなかった破壊衝動が心の奥底で叫んでいる。

『壊せ! 壊せ! 壊せ!――! 破壊しろ、踏み潰せ、蹂躪しろ!』

!!! お前ならできる。お前ならできる力がある! お前がやるんだ!――!』

今まで気がつかなかったことだが、元族長に手をかけられた瞬間に、

今まで燻っていただけの破壊衝動が強く感じられるようになった。

感じた力の塊は、今まで眠っていた野獣を無理やり起こしてしまったという印象だった。

そんなあまりにも強大すぎる力は、わたしを一瞬で支配してしまう。そしてわたしが心の底から求めていたものが、わたしの楽しみになった。

天然のいじめっ子が求めるものは、自分に都合のよい娯楽。

他人を問題の中心に引っ張り込み、またはその他人の周りで問題を起こして中心に持っていく。その他人の限界寸前まで慌てる姿を離れて眺める。

いじめっ子な幼なじみは力を手に入れて、支配されて、自分の欲求に素直に生きていく。赤からは、腹黒女なんて言われていたわたしはここに宣言する。

『わたし、今日から超腹黒女になります！』

届くかな・・・・・・・・赤に、わたしの気持ち。

さらさらフラッシュ（後書き）

そろそろ幼なじみの話も終盤に入ってきました。幼なじみの話の後
は、また赤の話に戻ります。

おねがい（前書き）

幼なじみはどうなったのでしょうか？

おねがい

「ムッあの小娘の雰囲気が変わった!? どういうことだ!?」

目の前にいた、可愛いが特に力があるようには見えなかった少女の変化に元族長はすばやく反応する。

「おいっ! おぬしは何じやっ!」

「えっわたし? わたしは映日果えいじつか 葵あおい。ただの高校生なんだけど?

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

巨木の民の人々からは、自分の性格のせいで嫌われていることは知っていたが、性格は直せるものじゃなかった。そして、元族長が一番に誇ることができることは戦闘だった。

歴代最強。とまで言われてきた元族長だからこそ死んだ後でも現世に影響することができて、触れることもできるというのが元族長の考えだった。

そして、歴代最強とまで言われたからこそ、目の前にいた少女の力の強大さに気がついた。そして、その力が自分の手に負える代物でもないことを。

「くそっ、だからこそ災いをもたらすと言ったのじゃ!」

そして元族長は、少女の動きに注意を払い、出方を待つことにした。

わたしは右手を上げ、手刀の形にして振り下ろす。力加減を考えて、肉眼では確認することができないほど離れた場所にある岩が真つ二つになったことを確認する。

「うん。力の使い方は大体分かった」

今度は歌う。小さく小さく分からないほどの声で、

わたしの目の前の砂原に、巨木の芽が1つ生えてくる。その巨木の芽は10秒ほどで周りにある巨木と変わらないほどの大きさになった。

「うーん。こんなものかー」

わたしがそう呟いたとき、ちょうどいいタイミングで族長が目を覚ます。元族長とくだらない争いをしたことで気絶した族長は、幼なじみの変化を知らない。というか、起きていても変化に気がつかなかっただろう。

「うーん、俺はどうしていたのだろう？」

「あっそうだ！ 元族長から女神様を守るために戦ったんだった！」

ゆっくり上体を起こしながら、首を『コキッ、ゴキッ』と鳴らすと、族長は周りを見渡した。

「おっ元族長、そこにいたか！　女神様は元族長であろうと指一本触れさせないぜ！」

今の状況を理解していない族長は、今がどんな場面なのかを知らない。そんな場違いなのは族長だけだったが、『おーい』と言う声で、さらに増えた。

「おーい族長。元族長の家をみんなで捜してようやく見つけたよ、元族長のお宝」

「いやー関係ないものばかりゴロゴロ出てきて大変だったよ」

「ただでさえ元族長の家は広いっていうのに、俺たちが物置にしたせいで何がどこにあるのか分からない常態で、大掃除までしてきたよ」

「しかも元族長、巨木の民の俺らが崇めていたご神体を切り抜いてその中に隠していたし。ご神体に扉をつけて簡単に開けるようになってたし」

「そうそう！　ご神体自体が冷蔵庫にもなっていたしなー」

「元族長はひどいよねー 私たちには何も言わないで自分だけ冷蔵庫なんかに作って、楽しんで」

「おう！ だから俺は冷蔵庫の中に入っていた調理済みの肉を食ってやったぜ……『ボタン』うっ！？ はっ腹がっ！！！」

「おっおいしっかりしろ！ だからあれほど食べるなって言ったんだ！……うおっ！？ 腹があ……！」

「バカヤロー！ 死にそうにしてんじゃねー たかが腹痛だろう？ そんなものきばって直せ！」

「どっとうしたらいいだ！？ そ、そうだ！ 女神様だ！」

巨木の民の人々はそんな会話を続けると、最終的に女神様に頼るという事に落ち着いたようだった。言うのは何だが、自分勝手すぎる人々だ。

「女神様！ クソ元族長のせいで腹痛になった者がいるんです、助けてやってください！」

わたしの目の前で膝をつき、若い男がわたしに向かってそう言ってきた。

「うーん。トイレにでも連れて行けば？」

わたしがそう言うと、

「なっなるほど！ さすがは女神様だ！」

わたしは当たり前な対応をしたと思ったけど、巨木の民の中でわたしの株はさらに上がったらしかった。バカというか、犬みたいな人

々だ。わたしがそう思っていると、今まで外野を決め込んでいた元族長がわって入っていた。

「バカかおぬしら！ この小娘は当たり前なことしかいておらんし、それにこの小娘は脅威だ！ おぬしらこの小娘に関わろうとするんじゃない！」

「あっ何か言ってきたと思ったら、元族長じゃないか」

「ほら元族長これあんたが言っていたお宝だよ！」

若い女が元族長の言っていた写真集を『ポイ』っと投げると、『あッなんてコトを！？』と言って、必死に空中キャッチする。

「ふう、助かったのお……あっ？」

元族長がお宝の写真集をキャッチした瞬間、元族長が消えてしまった。きれいにさっぱりすっきりと。思うに心残りが無くなって行ってしまったのだろう。成仏成仏。

「おっ元族長が消えたぞ、どういうことだ？」

「そういえば、写真集を見つけたら成仏するって言っていたし、めでたしめでたし」

「そうだなっ。はっはっはっ！」

元族長が消えたというのに笑っている。緊張感まで無い人々だ。わたしはわたしの娯楽のために彼らを利用しようとするが、彼らは特に考えずに引き受けてくれるだろう。

「お願いがあるんだけど聞いてもらえるかなあー」

わたしは少し言いにくそうに話し出す。

「おっ、女神様が俺たちにお願ひ？　女神様のお願ひなんだから聞かないわけ無いだろう」

「そうだよ、何でもいつてください女神様！」

「えっじゃあ……ここにお城を築いてね、1週間以内に『ニコッ』」

わたしは微笑みながらそう言った。

おねがい（後書き）

一応、幼なじみの話が終わります
次回は、赤の話の予定です……

カレー日和（前書き）

赤とカレーが織り成すハーモニーの物語

カレー日和

分からない。俺がこの世界に着いたときから一緒だった魔王の力が無くなってしまった。分からない。

どうして無くなってしまったのだろうか？

それにまだ謎な点もいくつかある。一応、分かりやすく1、2、3と分けてみる。

1、なんで気絶したのか？

2、なんで魔王の力が無くなってしまったのか？

3、なぜこの世界にカレーがあるのか？

1の、なんで気絶してしまったのか。これは俺には分からない。気絶した後魔王の力が消えていて、何か魔王の力に関係していると言うことだけはわかるが、それだけだ。

2の、なんで魔王の力が無くなってしまったのか。これはもっと分からない。なんでだろう？俺ではこの謎を解き明かすことはできないだろうし、理解したくもない。

別に無くなってしまってもいい力だったので、無くなって清々するくらいにすがすがしい。いやあ、今まで俺の力になってくれていた魔王の力だったが、少しだけ残念な気がする。少しだけなんだからねっ！

結局のところ魔王の力の消失のことはよく分からないので、捨てておく。

そして……今一番気になるのは、カレーのことだった。

俺はついさっきまでカレーを食べていた。

カレーは好きだ。カレーLOVEだと言っている。それくらいカレーが好きだった。

しかし——俺はついさっきカレーに裏切られた。カレーを食べた瞬間に気絶してしまったという、まさかの裏切り出だ。俺はこんなにカレーを愛してきたと言うのに。もう嫌だ。俺はカレーを信じられないかもしれない。

（クソッ！ カレーめっ……覚えていろよ！）

（ハッ！？ 俺は何を考えていたのだ！？ まさか俺の好きなカレーの悪口を言っていたのかっ！？）

カレーを食べて気絶してしまった俺は、ついつい知らないうちにカレーの悪口を言っていたようだ。まさか気絶をしたことをカレーのせいにしたとは、なんということかつ。

思い出せ俺。俺は今までカレーに助けられてきた。カレーとともに生きてきた。そんな俺の戦友、友の悪口を言っていたとは。俺はなんて情けないのだ。カレーよ、済まなかった……

（あれっ？ 俺は何を考えている？ 今考えなくてはいけないことは、カレーのことじゃなくて俺の身に起きたことじゃないのか？ いや、魔王の力がなくなっている事実のことか？）

気絶から目覚めた俺は、素敵なことに思考がどこかに飛んでいたようだ。いけない、俺には旅の仲間がいたはずなのに、カレーなんかに逃げてしまうとは……………

ようやく現実に戻った俺は、置かれている状況を理解した。

「体がだるいつ」

「！？ 魔王様！？」

「どうしたリンっ？ 体がだるいつ」

「えーっと……………大丈夫ですか？」

「大丈夫だぞっ 体がだるいつ」

「あっあの、お体は大丈夫ですか？」

「全然大丈夫じゃない！」

「えっえーと……………私に何か出来そうなことはありませんか？」

「・・・・・・・・カレーを下さい」

「カレーってなんですか、魔王様？」

「もう嫌だあああああ！！！」

そうして俺は駆け出した。あてもなく、前も見ずに走り出した。叫びながら走り出した。何かに逃げて走り出した。わけも分からず、走り出した。

後から考えたことだが、このときの俺は精神不安定な状態だった。右から見ても左から見ても精神不安定。俺の周りのものの全てが、俺が考えていること全てが俺を恐怖にかけさせた。

そうして、息が切れても走って、力尽きるまで走った。

力尽きて、つまずいて転がって、俺は大の字になって倒れた。そしてそのまま気が済むまで俺は寝ていたと思う。

気がつくとも知らない場所にいた。別の世界に来たのだから全てが知らないことなんだが、そんなことは関係無しに知らない場所。

・・・・・・・・馬の上に立っていた。

『ビシッ』っと、馬の上でカッコイイ決めポーズを決めていると、目に目が覚めた。

そりゃ知らないよね。馬の上に立っているんですから。

カレー日和（後書き）

今回はあまりにもバカな話ですいませんっ

華剣乙女騎士団（前書き）

赤のへたれな物語の始まりです

華剣乙女騎士団

俺は生まれてこの方馬に乗ったことが無い。俺だけじゃなく、ほとんどの人間がそれに該当されると俺の経験がそう言っているが、普通にも考えても馬と触れ合うなんてこと自体無い人間も多い。

馬に乗ったことは無いが馬と触れ合ったことならある。

ここで自慢しても何にもならないことだが、一応言っておきたかった。それだけだ。

前置きからも読み取れるように、俺は今、馬と関わっている。ただ関わっているんじゃない、馬に乗っている。俺の人生で初めての経験だ。嬉しくなる。

さらにさらに、ただ乗っているんじゃないくて馬の上に立っている。手綱も握らず両手を高く上げポーズを決めながら――目が覚めた。

「!?!? どこっ、ここどこっ!?!?」

あまりにもふざけたポーズを取りながら、あまりにも素直に驚いて、俺は馬から振り落とされた。

「でっ!?!?」

地面に背中から叩きつけられ、肺の中にある空気を全て外に吐き出してしまい、俺は絶息寸前になる。痛みをこらえて転がりまわっていた俺に、上から優しい声がかかる。

「大丈夫ですか？」

「だっだいひょーふ！」

鈴の音を奏でるような響き渡る優しい声に、俺は条件反射で返事をしようとして失敗する。いまだに酸素量が足りないからだ。

（落ち着けえー俺っ！ きちんと深呼吸して答えれば難しい問題じゃない。用は深呼吸うー）

『すーはーすーはー』と、深呼吸を繰り返し、俺は返事をする。しっかりと親指を立てることを忘れずに。

「大丈夫です！」

「……………面白いですね」

コロコロと玉を転がすように笑うおねえさん。その笑顔は純粹無垢な赤子のようなだが、俺には少し嘘くさい気がした。なんでだろう？

俺が笑顔に疑問を感じたことを、自分の身に起きていることが理解できずに疑問を感じていると受け取ったのか、おねえさんは自分の身の上を語りだした。

「わたくし達はギルド——華^は劍^{なく}乙女騎士団^し。出来てまだ1年ほどですが、その名前が大陸中に響き渡るほど有名ですわ」

「わたくしは華劍乙女騎士団を立ち上げたギルドマスターにして、キサラ・アイデストと言います。ご存知ありませんか？」

「いえ、まったくご存知ありません」

「……そう」

そう言って顔にサツと陰りがさす、キサラさん。年上か年下か分かりにくい外見をしているが、たぶん年上だろう。俺はそう判断しキサラさんと呼ぶことにした。

しかし——だからなのかと納得する。ギルドに入っているからこそ、この格好だろう。

目の前にいるおねえさんは全身に青と白の模様の入った鎧を纏い、その腰には剣をさしている。それだけではなく、馬のほうにも同じような鎧がつけてある。

そして一番目を引いたのが、装飾だった。

手首や臂^{ひじ}につけている輪状のかざりが色鮮やかで、なんとも目を引く。こんな派手な装飾をしているのかと思っていたが、ギルドマスターが率先して付けているのだから、コレがこのギルドの決まりなのかもしれない。

これで俺がキサラさんと一緒に行動している理由もわかる。遠征か何かの帰りで、偶然倒れている俺を見かけて助けてくれたんだろう。

「えーと、俺はキサラさんに助けてもらったんですか？」

「・・・・・・・・そう」

「やっぱりそうですかっ！ いやーありがとうございます！」

「・・・・・・・・そう」

「???? キサラさん？」

「・・・・・・・・そう」

「えっちょっとうしたんですか？」

「・・・・・・・・そう」

俺がなにを言おうと、『・・・・・・・・そう』としか返してくれない。俺はだんだん悲しくなってきた。というか、虚しくなってきた。

「キ、キサラさん？」

「・・・・・・・・そう・・・・・・・・よね」

『そう』だけしか言わなかったのが、『よね』まで言うようになったキサラさん。俺は新しい変化に喜んでいると、

キサラさんは『パチン』と、指を鳴らす。そして当たり一面に乾いた音が響き渡る。

「なんでしょうか？」

「っ!？」

今までキサラさん1人だけしかいなかった。だから俺は1人でいるとばかり思っていたが、実際は違った。いきなり周りの草むらや木の後ろからワラワラと、キサラさんと同じ鎧を着た女の子たちが現れる。

その数ざっと20人。良く俺は気がつかずにいたものだと感じる反面、ギルドマスターが1人でうろつくわけ無いかということに、いまさら気がついた。

「その男の子を連行します！」

「なんでっ!？」

「「「「「はいっ!」「」「」「」

「当たり前みたいに返事をしないでえ——」

そうして、か弱き俺は、強き乙女に連行されることになった。

華劍乙女騎士団（後書き）

乙女騎士団の規模は大きく、出来て1年で3万人もギルドに入っている。

入る資格があるのは女の子だけで、男子禁制。

ギルドを1年でここまで巨大にして見せたキサラ・アイデストには2つ名があるらしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3414v/>

魔王から勇者になるために

2011年10月29日17時19分発行